

連続ドラマ制作による学生と豊富町住民 の意識変容

～『エゾガンゾウの咲くまちへ』の制作過程に注目して～

侘美俊輔, 牧野竜二, 黒木宏一, 若原幸範

● 要約

現代社会は、若者を中心に「テレビ離れ」が指摘されている。しかしながら、動画配信サイトや SNS などのソーシャル・メディアの充実により誰もが簡単に「動画」を視聴できる時代となった。さらにはスマートフォンなどで気軽に「動画」を制作することが可能となった。こうした時代背景の中で、筆者らは、地域の民間企業と連携し、地域密着型の「連続ドラマ」を制作する授業実践を行ってきた。

本稿は、2016 年度に稚内北星学園大学と民間企業の民学連携により制作された連続ドラマ『エゾガンゾウの咲くまちへ』の取り組みを俯瞰的に検討、考察することを目的としている。その結果、本ドラマ制作では大学と民間企業との連携により、動画制作を通じた地域とのつながりの構築、学生、豊富町住民の双方にとって意識の変容が見られたと推察される。

● キーワード

動画制作

ドラマ制作

民学連携

地元学

地域理解

YouTube

はじめに

NHK 放送文化研究所による「国民生活時間調査」(2015)を参照すると「1日15分以上テレビを見る率」が8割程度であったものの、今後10年で加速度的に「テレビ離れ」が進行することが予測されている。しかしながら、現代社会で動画を目にしない日はない。フェイスブック、YouTube、ニコニコ動画、各企業のホームページ、などインターネット上では無数の動画が制作され、再生されている。総務省の「平成27年通信利用動向調査」などを参照すると、スマートフォンの保有率が2010年からわずか5年で約8倍に増加するなど、視聴端末の個人化が進行している。また、最近のスマートフォンには動画撮影機能が搭載され、「4K画質」というプロと同等のスペックで気軽に撮影が行える時代となってきた。現代社会に暮らす我々にとって「動画」は、日常生活の中における役割が日々増大しており、誰もが「動画」を視聴、制作することが当たり前の時代となってきた。

映像制作、発信という作業は、「地元でのネタや問題、話題の掘り起こしから始まり、企画を立て、取材相手に交渉し、撮影、構成、編集、完パケ、さらには、マスメディアへの広報、地元市民や行政への宣伝など、あらゆることを学ぶ、映像制作、映像発信はまさに『総合学習』である」とされる(松野, 2005)。映像制作、発信が「教育」、とりわけ大学教育として担う役割、期待は大きく、その期待値は年々高まっているものと推察される。

稚内北星学園大学(以降、「本学」とする)では、2001年から現役のTBSディレクターを講師に招いて映像制作の集中講義を始めたとされる(高谷, 2005)。現在のように「動画」が日常的なものとなる以前から、映像制作に目を付けていたことは、先見の明があった画期的な取り組みの1つであったと言える。その後、本学ではNPO法人「映像コミュニティ・ムーブユー(以下、「ムーブユー」とする)」が設立された(大杉, 2010)。この「ムーブユー」ではインターネットサイト「さいほくネット」を設立し、映像を軸に日本の最北から情報を発信し続けた。しかしながら、担当教員の退職により、地域と映像を結び付けた実践的な取り組みは衰退した。

このような状況下で、2013年度から非常勤講師となった筆者(牧野)が指導した最初の3名の学生たちによるドキュメンタリー作品「温泉街に、明かりをつけて。～最北の温泉郷豊富温泉～」が数多くの映像コンテストで賞を受賞し、2016年には「地域発デジタルコンテンツ部門」において総務大臣奨励賞を受賞した。その後に制作した「感動がひとを動かす～市民第九合唱団の軌跡～」、「私たちは、【カラフト】を知らない。」などのドキュメンタリー作品も全国の映像コンテストにおいて数多くの賞を受賞している。後者は、「全映協グランプリ2016」において文部科学大臣賞を受賞している。そのため、現在では市内を中心に「稚内北星学園大学＝映像」という図式が構築されつつあり、本学への動画制作の依頼は増加している。

2015年には、上述した「温泉街に、明かりをつけて。～最北の温泉郷豊富温泉～」の冒頭にも登場する(株)川島旅館(以下、「川島旅館」とする)と本学地域創造支援センターとの間で映像制作に関する業務請負契約「豊富温泉紹介動画制作請負業務」を締結した。この映像制作は、川島旅館が経済産業省「地域産業資源活用事業計画」に採択された「豊富温泉を中核とした食と美容をテーマとする滞在型観光事業(事業者名:川島旅館)」からの業務請負契約として実施した。本学は、「豊富町」、「豊富温泉街」⁽¹⁾の映像素材の提供、川島旅館の「Butter Field」や「湯あがり温泉プリン」などのムービーなどを制作した。

2016年には、川島旅館から「豊富温泉や豊富町を紹介するための動画素材の提供とともに、今後の豊富温泉をPRするための企画を提示することにより、豊富温泉のプロモーション力を高めること」を目的としたドラマの制作を依頼された。この依頼を受け、学生と教員が脚本、キャスティング、カメラワークやSNSなどによる情報発信、プロモーションなどドラマ制作のすべてを企画した。ドラマのタイトルは「エゾカンゾウの咲くまちへ（以下、本ドラマとする）」とし、その後先行集客用の予告編（アバン）が3月より川島旅館のホームページにて公開された（アクセス数：2,141回12月31日現在）。

上述の経緯を経て作成されることとなった本ドラマ制作における筆者らの関心は4つある。第1に映像制作に当たった「学生の地域意識に対する変容」への関心である。稚内から豊富町へは距離にして約40キロ、車で約40分程度の距離にある。現在では、国道40号線の豊富バイパスの完成により豊富町は、旭川や札幌への移動の通過点となることが多いところとなっている。しかしながら、今回の映像制作を通じて、豊富町の自然、人、食に触れながら撮影、編集していく過程をとおして「豊富町」や「豊富温泉街」の風土や歴史などを学ぶ契機となることが推察される。そのため、学生にとって「地域を学ぶ」という効果があるものと期待できる。

第2に、「授業」と「請負業務」を連動させた「新たな授業展開」への関心である。本連続ドラマの制作指導は、本学非常勤講師である筆者（牧野）を中心とした「映像メディア論、映像メディア演習（牧野・侘美）」の授業と課外活動（請負業務）が連動する形式で実施した。従来、学生はアルバイトと授業を切り分けて生活している。しかしながら、「通常業務と残業」の関係性のように、授業と請負業務を連動させた新たな授業展開を模索する必要があると考えられる。学生の作業量は通常授業の範疇を超えるものの、学生は、金銭や時間的な不安を感じることなく、本ドラマ制作を遂行できると考えられる。さらに、民間企業の川島旅館から請負業務を受け、依頼主とのやり取りを通じて、実際に自分たちで企画、撮影、編集した作品を制作する過程を通して、学生にも「責任」や「納品」など通常の授業では味わうことのできない「リアルな緊張感のある業務」を体験できると考えられる。

第3に、「実際の旅行者（＝動画視聴者）」への関心である。本研究における位置づけは副次的なものであるものの、本ドラマが旅行者（動画視聴者）、「豊富町」、「豊富温泉街」の観光業の関係者へどのように受け入れられたのか、旅行者（動画視聴者）の視点から見た評価や課題への関心である。同時に、本ドラマ制作による集客へ与える影響や、「豊富温泉街」からの反響についても関心がある。

第4に、「映像と地域づくり」を融合させようとする試みへの関心である。こうした取り組みは萌芽的であるが、例えば、高谷邦彦（2008）は、「さいほくネット」のアクセス・データの解析を通して、地域情報の発信において「地域の景観や歴史に関する動画コンテンツを制作し、ユーザー参加型のサイトを利用して発信してゆくこと」の有効性を論じている。このように地域住民によるインターネットなどを活用した情報（映像）の発信は、今後も発展が見込まれるコンテンツの1つとなりえるものと推察される。

以上のように、映像制作から派生する効果は多様にあるものと推察される。しかしながら、映像制作過程を俯瞰的に検討したもの、つまり映像制作にあたった学生や住民たちの学び、その相互作用、地域の変容や、観光との連関を重層的、学際的にとらえたアプローチはほとんど見受けられない。

そこで上記の関心を踏まえた筆者らの問題意識は、①連続ドラマ制作における過程を通じた学生たち、「豊富町」、「豊富温泉街」住民の学びは何か、②「授業」と「請負業務」を連動させた新たな授業

展開の可能性についての2つである。本稿では、学生による「豊富町」や「豊富温泉街」を舞台とした連続ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』の制作過程に着目し、①制作に当たった学生たち、②「豊富町」や「豊富温泉街」の住民にどのような意識の変容があるのか検証することを目的とする。本研究では、上述の問題意識を踏まえながら学生による連続ドラマ制作を「映像制作」の枠組みにとどまらず、学生、地域住民、旅行者（動画視聴者）や、地域づくりなど多様な視点を取り入れた分析を試みる。とりわけ本学は「情報メディア学部」を持つことから、映像制作を通じて学生や地域住民がどのように学びを深めるのか、その一連の制作過程を実践的に追い上げ検証することには、一定の意義があるものと推察される。このような民間企業との連携による教育実践は、COC事業終了後におけるモデルケースの1つとなりえるものと推察される。

1. 事業の概要と撮影の内容

1-1. 2015年の川島旅館との連携

前述のように、2015年には川島旅館との業務請負契約「豊富温泉紹介動画制作請負業務」により、本学は「豊富町」、「豊富温泉街」の映像素材の提供、川島旅館の「Butter Field」や「湯あがり温泉プリン」などのムービーなどを制作した（写真1）。

映像素材の提供では、豊富町の主要な観光地（サロベツ原野、西海岸、宮ノ台展望台など）の晴天時に撮影した素材をそれぞれの項目にまとめ、ハイビジョン画質のデータとして納品した。



写真1 エゾカンゾウの撮影風景



写真2 豊富温泉街の風景

「Butter Field」は、2015年9月21日に、学生2名（1年生）と牧野が撮影した（撮影7時間、編集5時間）。撮影は、川島旅館の工場、兜沼公園、その他豊富町内で行い、本学の撮影機材を使用した。牛やそれぞれのフレーバーのイメージカット、バター製造風景、バターを中心としたピクニック風景の素材を撮影した。また、撮影スタジオでの撮影された素材も提供していただいた。編集においては、バターを家族との団らん（食卓）の中心に置くイメージを表現するよう心掛けるとともに、バターが自然な素材を使用していることを強調するため、豊富町の牧歌的風景を挿入し、ナチュラル感を演出した。

「湯あがり温泉プリン」は、2015年12月19日に、学生4名（1年生2名、3年生1名、4年生1名）と牧野が撮影、ならびに女子学生3名（3年生1名、2年生2名）に映像用モデルを依頼、4年生1名に編集業務を実施した（撮影7時間、編集5時間）。なお、撮影は本学の「わくほくメディアラボ」をスタジオと

し、撮影機材を配置した。映像では、女子学生3名が楽しく談笑している様子、6種類のプリンをはじめ、使用している牛乳の産地である豊富町の牧場の風景、湯あがり温泉プリンの製作風景、プリンの食べ方などを紹介している。ムービーの最後には、ご息子にもご登場いただき、子どもから大人まで誰もが安心して食べられるプリンであることを紹介している。とりわけ、プリンの食べ方やプリンの「ぷるぷる感」、「とろとろ感」を映像においても描写できるよう作成した(写真3)。

これら一連の業務には、1～4年生の計14名の学生が意欲的に参加し、特に1年生6名が中心となって活動を展開した。



写真3「湯あがり温泉プリン」のPR動画の制作風景

1-2. 本ドラマのコンセプト

2016年は、川島旅館と「豊富温泉紹介動画制作請負業務」の契約を新たに締結し、ドラマ制作を実施した。本ドラマの制作にあたった指導教員である筆者らによる「趣意書」の内容を以下に引用する。

この企画は、稚内北星学園大学の授業による一環(「映像メディア論・演習」として、北海道豊富町にある(株)川島旅館様のご協力のもと、「豊富町や豊富温泉を紹介するための映像素材の提供とともに、今後の豊富温泉をPRするための動画の制作を行うことにより、豊富温泉のプロモーション力を高めること」を目的としたオリジナルドラマを学生が制作するものです。

本ドラマは、天候や自然環境に左右されながらも、17名の学生が、半年間で延べ15回以上にわたる撮影を行っています。また、豊富町の住民、酪農家、施設などのなど多くの方々にご協力をいただきながら、映像の収集や編集等に取り組んでいます。私たちは映像、俳優のプロではありません。しかしながら、限られた条件の中で学生たちなりに豊富町・豊富温泉への“思い”を込めて制作しております。本ドラマをご覧いただいた皆さまが、「豊富温泉に足を運んでみたい」と思う一助となれば幸いです。(監修 牧野竜二 佐美俊輔)

(川島旅館エゾカンゾウの咲くまちへ公式HPより引用)

本ドラマでは、学生と教員が脚本、キャスティング、カメラワークなどドラマ制作のすべてを企画した結果、ドラマのタイトルは「エゾカンゾウの咲くまちへ(以下、本ドラマとする)」となった。本ドラマのコンセプト、企画段階における眼目は下記のとおりである。

本ショートムービー（ドラマ）の企画段階では4つの点に着目した。第1に、本ショートムービーでは、「きれい」になる過程を、肌や食事などの「直接的」なキレイさと、心理面などの「間接的」なキレイさの2つの側面に着目し、これらを両輪に「なりたい自分になる」ために変化していこうとする過程を描きだす。

第2に、本ショートムービーでは、「変わらない自然」と「変わりたい主人公」の対立構造に着目する。その中で、「豊富の自然」や「豊富の人」によって変わっていく主人公の様子を通して、30代女性の「きれいになりたい」を映像化していく。

第3に、「牧場の息子」を設定し、(…中略…)主人公にはない「不動、不変」の農業哲学を持った地元っ子を演じてもらう。

第4に、豊富町に暮らす住民、施設への着目である。このようにすることで、旅行者が実際に旅先で見る可能性のあるリアルな人間模様、景色を描写することが可能となる。具体的には、川島旅館の板長、女将さん、息子さんや温泉街の人々、さらにJRの車内、サロベツ湿原センター（以下、湿原センターとする）や、豊富町豊徳にある山岸牧場もロケ地として利用する。



写真4 「山岸牧場」における撮影風景

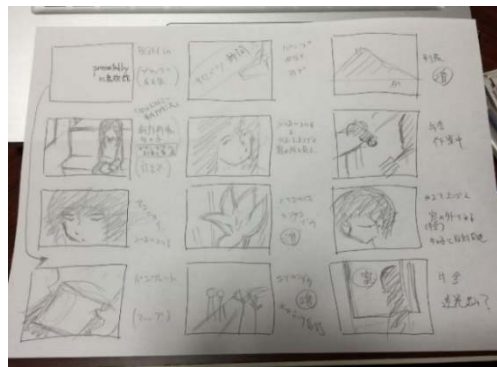


写真5 絵コンテ

2016年2月からは、予告編（アバン）の制作に取りかかった。学生2名（2年生1名、1年生1名）を俳優とし、筆者ら（牧野・柁美）が監修、学生2名（3年生1名、1年生1名）が撮影、学生2名（4年生1名、3年生1名）が編集業務を担当した。こうして作られた先行集客用の予告編（アバン）は3月より川島旅館のホームページにて公開され、アクセス数は2,100回を超えている（2016年12月31日現在）。

その後、2016年5月より本ドラマの制作が始まった。なお企画段階で、本ドラマは、全5話構成となることが確認され、俳優が登場する「ドラマ部分」と「ロケ地紹介」によりドラマ本編を補完する構成とした（図1）。作品は、10月より月1話ずつアップロードされ、2017年2月に全話がWeb上で公開される予定である（本稿執筆時）。



図1 本ドラマの1話分の構成内容

1-3. 制作体制と協力団体

本ドラマは、教員 2 名、学生 17 名（4 年 1 名、3 年 2 名、2 年 14 名）が制作した（図 2）。学生は大きく「ドラマ班」12 名と「ロケ地班」5 名の 2 つに分かれ、各班の 1 名には「広報班」を兼務した。本ドラマを制作した全 17 名のうち 15 名は、筆者らによる授業「映像メディア論 I・II；映像メディア演習 I・II（以下、「本授業」とする）」の履修者であった。本授業は、土曜日の午後が開講されていたが、撮影や天候によっては日曜日や休日、授業の合間をぬった平日にも撮影も実施した。本授業が、土曜日開講となったのは、主担当の牧野が非常勤講師であり、平日は公務員として奉職していることによる。同時に本授業は、前述の「豊富温泉紹介動画制作請負業務」としての成果物を納品しなければならなかった。それ故に、通常の授業時数を超える作業量と映像の質的な要求が重なった。学生には、単位と同時に一定程度の謝金を支払いながら、本授業を展開した。

「ドラマ班」は、本ドラマのメイン部分の撮影を担当し、台本や脚本に沿った撮影を実施した。ドラマ班の 1 名と教員 2 名が中心となり「脚本」の構成を考案し、同学生がポスターの制作を行った（図 3）。「ロケ地班」は、本ドラマを補完するロケ地の紹介を行い、アクセス方法や実際に本ドラマに登場した方へのインタビューなどを実施した。「広報班」は、Facebook, twitter, Instagram などの SNS による発信、学内限定で実施した「先行上映会」の司会などを担当した。

映像撮影の技術協力は、「ムーブユー」に「ドローン（無人航空機・マルチコプター）」を使用した空撮のご協力や、スタビライザー付カメラの提供をいただいた。

ドラマ、ロケ地紹介の撮影に際しては、豊富町、「きっさすてーしょん」、認定 NPO 法人「サロベツ・エコネットワーク」、環境省北海道地方環境事務所、北海道旅客鉄道株式会社、山岸牧場からの協力をいただいた。また、ドラマで使用した自転車などは、豊富町観光協会から無償提供を受けた。さらにホームページやインターネットを活用した広報面では、株式会社エゾリユウの協力を得て実施した。

本授業の担当教員 2 人は、全体的な監修を行うとともに、牧野が映像の撮影や編集指導を、佐美が記録、学生との連絡、会計を担当した。

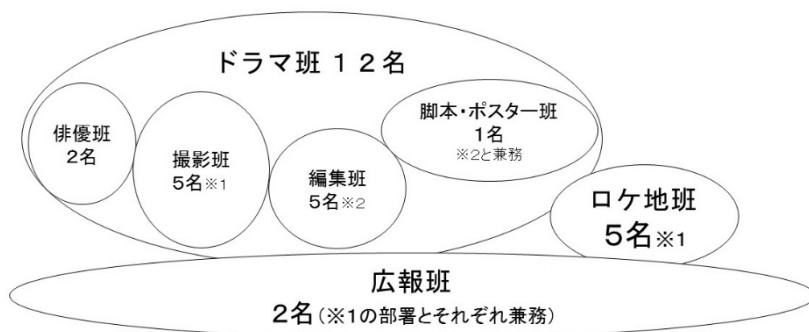


図 2 学生の組織体制



図 3 学生制作によるポスター

1-4. 本ドラマのあらすじ

本ドラマは、2泊3日の小旅行をテーマとし、この3日間の設定の中に豊富町の5月～9月の様々な景観を散りばめて構成されている。脚本は、2016年1月から学生と教員によって、「癒し」、「きれいさ」、「変化⇔不動」などをキーワードに、豊富町の観光名所やセールスポイントを織り交ぜた構成となるように作成された。脚本の完成までには、10回以上の会議がなされ、下記のように決定した(図6)。脚本づくりにあたっては、『一週間でマスター 斉藤ひろしのシナリオ教室』(斉藤, 2006)を参考にした。

旅に出れば、何かが変わるかもしれない。

そんな淡い期待を持った女性が、豊富町を訪れます。

この町の何気ない日常は、彼女にとって非日常。

これは彼女が変わる2泊3日のストーリーです。

(川島旅館エゾカンゾウの咲くまちへ公式HPより引用)

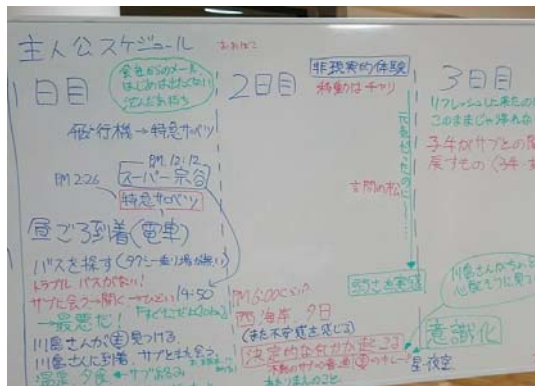


写真6 脚本会議の内容

シーン	内容	演出	特徴 (演出、台詞など)
1	カーテンが揺れる中(広角) 千花が私語る。		
2	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
3	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
4	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
5	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
6	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
7	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
8	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
9	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」
10	千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。千花がバスを降り、目的地に着く。		「目的地に着く」「目的地に着く」「目的地に着く」

図4 作成した脚本の一部

1-4-1. 本ドラマのあらすじ

本項では、本ドラマの全5話のあらすじを下記に提示する。ここで紹介したあらすじは、川島旅館の本ドラマの公式ホームページ (<http://movie.kawashimaryokan.co.jp/>) にて公開されているものである。

第1話 「こんにちは、豊富町」(10月公開)

人より牛の多いまち北海道豊富町を、一人の女性が訪れた。佐藤千花(ちか), 23歳。目的地の豊富温泉へ向かおうとした千花は、ふとした思い違いで大変な目にあってしまう。そんな中現れたのは、川島旅館の社長・松本康宏。エスコートにより、無事に旅館に到着した千花だが、そこで見たのは…。

第2話 「川島旅館」(11月公開)

千花は、川島旅館の女将・松本美穂の案内で、非日常の心安らぐひと時を過ごしていた。しかし、そこに現れたのは、牧場の息子・山岸純樹(じゅんき)。罪悪感の欠片もない純樹の態度に対し、千花は一向に納得がいかない。しかし、夕食時の社長の一言が、その気持ちを少

しだけ和らげることになる。

第3話 「軽トラにのって」(12月公開)

旅の二日目が始まった。朝から豊富町の自然を堪能していた千花だが、社長の機転により、天敵の純樹と豊富町を見て回ることになる。そのうち、次第に打ち解けて行く二人。牧場の牛舎の中で、牛の出産にも立ち会う。そして、千花はエゾカンゾウが咲いているというサロベツ原野へ向かう。

第4話 「エゾカンゾウの咲くまち」(1月公開)

女将に話を聞いてから、千花はエゾカンゾウを見ようと決めていた。サロベツ原野の湿原センターで、職員・嶋崎暁啓氏に原野の成り立ちを聞く。純樹と合流した千花は、広大なサロベツ原野と比較し、自分の小ささを実感する。そして一日の終わり、西海岸の夕日を見に来た二人だが…。

第5話 「あの花の咲く頃に」(2月公開)

旅は三日目。千花は、旅の目的を達成できないことに思い悩んでいた。ふと目にした自転車を借りて、どこかへ向かう千花。一方、普段通り、牛乳を配達しに川島旅館へ来た純樹。純樹は社長と女将に促され、千花を探しに行くことに。そして再開した二人は…。



写真7 本ドラマにおける撮影風景

1-4-2. 「エゾカンゾウの咲くまちへ」のロケ地紹介

本ドラマでは、ドラマ以外にも3分程度の「ロケ地紹介」を7本制作した。このロケ地紹介は、NHKの大河ドラマにおける「真田丸紀行」などを参考にし、ドラマ本編を補完することや、豊富町の観光名所を紹介することを目的に制作された。

こちらのロケ地紹介では、豊富駅、「豊富温泉（川島旅館）」、言問の松、大規模草地、サロベツ湿原センター、豊富牛乳、エゾカンゾウの7つを取り上げた。3分程度に編集され、学生によるナレーションを加えて制作された。学生による編集途中の映像、およびナレーション原稿は、豊富町観光協会の栗山尚久氏に確認、助言を依頼し、内容面における妥当性を担保した。



写真8 ロケ地班による撮影風景

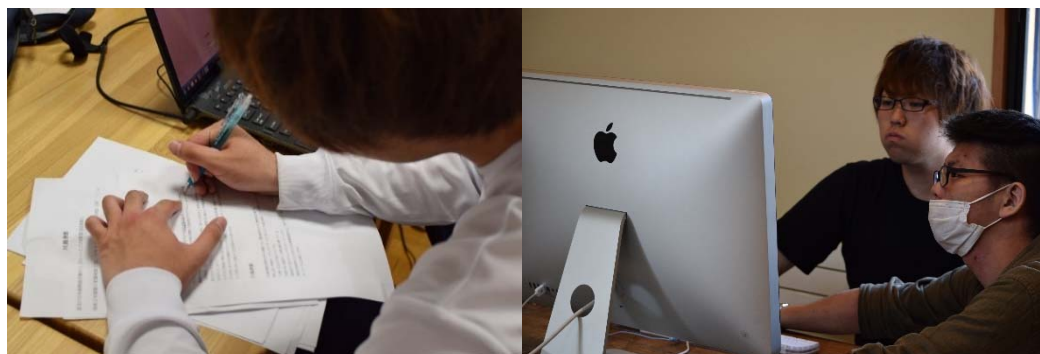


写真9 ロケ地班の原稿作成、編集作業の様子

1-5. 制作のスケジュール

本ドラマは、5月14日にドラマ班がクランクインして以降、下記の日程で撮影を実施した(表1)。以降では、その月ごとの撮影風景の様子と写真を提示する(写真10~19)。

表1 本ドラマの制作スケジュール

日付	ドラマ班	ロケ地班
2/7 日	アバン撮影	
5/14 土	駅、牧場風景の撮影	主要ロケ地巡り、観光協会訪問
5/21 土	宮の台展望台、言問の松、山岸牧場	
5/22 日	フットパス、川島旅館建設現場視察、山岸牧場	
5/30 日	山岸牧場、湿原センター	湿原センター
6/12 日		言問の松、大規模草地、豊富駅、山岸牧場
6/19 日	湿原センター(エゾカンゾウ)	
6/22 水		西海岸(エゾカンゾウ)、湿原センター(ドローン)
6/25 土		喫茶すてーしょん、湿原センター
6/29 水	湿原センター、一本道のドローン	
7/6 水	湿原センター(エゾカンゾウ)、大規模草地	
7/13 水	豊富駅、下沼駅	
7/16 土		大規模草地、下エベコロベツ川、湿原センター、言問の松
7/17 日		湿原センター、大規模草地、川島旅館(オープニングパーティ)
7/23 土	川島旅館(室内撮影)、西海岸夕日、言問の松、豊富駅、宮の台展望台	自転車マイルレース(タイムアタック)
7/24 日	川島旅館(温泉シーン:女子のみ)	自転車マイルレース(レース)
8/11 木	豊富駅、言問の松、湿原センター	
9/10 土		編集状況確認
9/11 日	板長、女将さん登場シーン全般(途中の道路、川島旅館)	
9/13 火	オロロンライン 夕日撮影	
9/25 日	旅館追撮	
9/28 木	夕食撮影	
10/1 土		ナレーション音取り、編集
10/2 日	湿原センター取材	
10/16 日	湿原センターにおけるドラマ撮影	湿原センターにおけるロケ地紹介
11/3 木	オフィスシーンの撮影	オフィスシーンの撮影(エキストラ出演)
11/7 月	オフィスシーンの撮影	
11/19 土		ナレーション音取り、編集
11/26 土	ナレーション音取り、編集	ナレーション音取り、編集
12/3 土	ナレーション音取り、編集	ナレーション音取り、編集

1-5-1. 5月

5月は晴天に恵まれることが多く、主に屋外の撮影を4回行った。豊富駅におけるクランクインを皮切りに、山岸牧場、フットパス、湿原センター、宮の台展望台、言問の松などの屋外ロケ地における撮影が順調に進んだ。



写真10 豊富駅における撮影風景



写真11 フットパスにおける撮影風景

1-5-2. 6月

6月は全体的に土、日の天候が思わしくなく雨、曇りの日が多かった。6月の前半は、主演女優（以下、「女優」とする）の介護等体験実習への参加、ゼミでの遠征なども重なり思うような撮影スケジュールを組むことができなかった。このような時には、ミーティングの実施や編集班による編集作業を実施した。

6月の下旬からは、サロベツ湿原や海岸線の稚咲内地区で「エゾカンゾウ」が咲き始めた。しかしながら、晴天下で通常授業の土曜日に撮影が実施できたのは、6月19日（土）の一度だけであり、それ以外は授業の合間を利用し、晴天の多かった水曜日の午前中に撮影を行った。



写真12 雨天時のミーティング風景

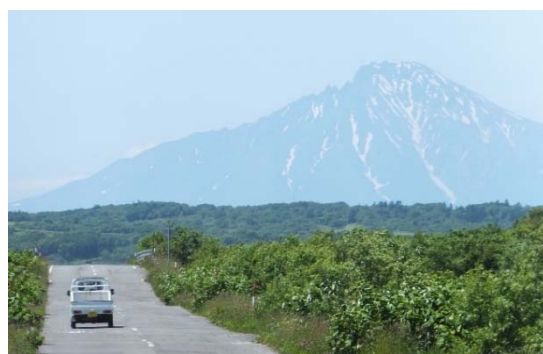


写真13 農道と軽トラの撮影風景（水曜日実施）

1-5-3. 7月

7月の前半は全体的に土、日の天候が思わしくなく雨の日が多く、前述のように「エゾカンゾウ」の開花に合わせた撮影が思い通りに実施できなかった。7月の3連休は女優、男優ともにプライベートな予定があり撮影が実施できず、撮影スケジュールが予定通りに遂行できていなかった。

しかしながら、7月23日、24日における川島旅館における「合宿」で遅れを取り戻すことができた。7月26日にリニューアルオープンする川島旅館の開業前に、社長と女将の計らいで学生16名、教職員3名の19名が宿泊することとなった。宿泊を伴う合宿であったため、学生は夕方以降も作業を実施できた。そのため夕陽シーン、夜の旅館シーンなど通常の授業の範囲内では実現が難しかったシーンの撮影を実施できた。また旅館内に客が不在であったことから、カメラアングル、照明など学生たちの撮りたいカメラワークで撮影することができた。



写真14 旅館内における夜間撮影の風景



写真15 撮影合宿の打ち上げ

また、合宿では「温泉シーン」の撮影を行った。倫理的な点から、女優は水着着用で撮影を行い、撮影には女子学生 5 名のみで実施した。筆者ら監修者を含むすべての男性は撮影現場に立ち入らず、女子学生 5 名と女優の計 6 名による撮影を行った (写真 16, 17 は女子学生が撮影した写真)。その後の編集作業も女子学生のみで実施した。



写真 16 温泉の撮影風景



写真 17 女子学生のみによる入浴シーンの撮影風景

1-5-4. 8月～11月

8月は全体的に晴天の日も多かったが、筆者(牧野)と学生の都合(学校行事、インターンシップ、帰省など)が合わず、思い通りに撮影を実施できなかった。8月の撮影は、「海の日」の祝日に一度実施できたのみであった。

9月は、天候や自然環境の影響を受けないシーンや、川島旅館の女将、板長さんなど外部の方々が登場するシーンを中心に撮影した。女優、男優、板長、女将の登場するシーンは4人の都合を中々合わせることができず、撮影が9月までずれ込んだ。この時期には秋の気配が見られはじめ、新緑の5月とは大きく異なる風景となった。しかしながら、旅館内部、旅館周辺や接写での撮影が多かったため大きくイメージを損なわない映像となった。その他には、夕食のシーン、夕陽のシーン、湿原センターの嶋崎氏(認定NPO法人「サロベツ・エコネットワーク」代表)のからの説明シーンなどの室内撮影、天候の影響を受けないシーンや、ナレーション撮りを行った。11月7日にオフィスシーンの撮影を行い、クランクアップとなった。



写真 18 湿原センターにける撮影風景



写真 19 ロケ地紹介ナレーション撮りの様子

1-6. 先行上映会の実施

12月13日には、本学の教職員、一部関係者向けに先行上映会を実施した。Web上では、第3話が

公開されたところであり、4、5話を学内向けに先行公開した。学生20名、教職員15名が上映会に参加し、川島旅館の松本氏、豊富町観光協会の栗山氏を招待し、ご参加いただいた。

先行上映会では、学生4名、関係者2名、教員と学長からそれぞれが壇上にてスピーチを行った。下記に監督学生のスピーチの一部を引用する。

本日はお忙しい中、急な招待にもかかわらず、たくさんの方にお越しいただきありがとうございます。

このドラマは全コースの学生がいて、中々スケジュールが合わない中、スケジュールを合わせるために朝早くから撮影や、少人数での撮影が大変でしたが、撮影中には1人1人が役割を持ち、それぞれがどう撮るとベストなのかを考えながら撮影しました。なので、学生一人一人が監督なのではないかと思っています。

撮影をする際には、豊富町の方々の協力や、先生方の指導があったおかげで映像撮影の初心者にもかかわらず、このドラマをつくりあげることが出来ました。それでは、「エゾカンゾウの咲くまちへ」をどうぞご覧ください。



写真 20 監督学生による舞台挨拶



写真 21 先行上映会の会場の様子

その他にも、俳優班の2人、ドラマ班、ロケ地班の各代表のスピーチ、豊富町観光協会栗山氏、川島旅館松本氏のスピーチの一部を下記に引用する。なお、個人情報保護の観点から一部内容を削除した。また内容の補足のため、筆者による補足を一部加えている。

俳優班 佐藤千花役のスピーチ

今回の上映会にはなかったんですけど、予告（アバン）を含めると撮影期間が約1年間、長い間この動画にかかわらせていただきました。中には朝早くから撮影を始めたり、夜遅くまで帰れなかったっていうこともあるんですけど、こうやって完成をみると「全部楽しかったな」という気持ちで今とてもいっぱいです。私も思い出に残ったことが第2話にあった旅館での食事のシーンなんですけど、板長さんの料理を食べることができて本当においしくて幸せでした。撮影行ったメンバーは、実際は全部食べれてなくて、お鍋とかも食べれたのが私一人だったので、ちょっと優越感っていうか、「いいだろー」っていう気持ちでした。動画撮るにあたって、みんなも言ったんですけど、たくさんの人に協力していただいて、応援し

ていただいて、迷惑かけたと思いました。本当にこうやって完成することができてうれしく思います。

俳優班 山岸純樹役のスピーチ

私は一番思い出に残っていることを軽くお話ししたいと思います。(…中略…)牛が生まれるシーンなんですけど、実は打ち合わせなど何もなくて、(場長が)いない場所で撮影していたら、「生まれちゃった～」みたいな形で正直焦りましたけど、そこもちょうど動画を撮っていたらしくて、ちょうどいいからそこも使おうということで使いました。反面自分としては苦しい部分もあったんですが、コンディションの問題ですとか、そこはやっぱり協力してくれた学生、牧野先生、侘美先生には軽く迷惑をかけてしまったかなと思っています。この1つのエゾカンゾウの咲くまちへという大きな作品を作り上げる上で協力してくれた方々、豊富町観光協会の皆さまでもしたり、川島旅館の松本夫妻であったり、また協力してくれた学生みんなで作りあげたものとなっています。これで1つを成し遂げられたことは、私の中ですごくありがたいことだし、誇りに思っています。

ロケ地班 代表学生のスピーチ

僕が担当したロケ地班は、ドラマ班と違って、人を映すことはほとんどなくて風景などを映すことがほとんどの内容で、人を映すってなると自分の携帯で何度か経験はあるんですけど、風景を映像で撮るっていうのはあんまり経験がなくて、本当に最初は戸惑うことが多くて、苦労ばかりだったのですが、川島旅館の松本様や、豊富町観光協会の栗山様をはじめとたくさんの方々にご協力いただきながら、本当に豊富町のいいところを一杯詰め込んだロケ地紹介の映像になったのではないかなと僕は思います。地元稚内なんですけど、地元じゃない豊富をどうよくみせるかっていう、そこは本当に苦労しましたが、本当に豊富町のいろいろな発見をしながら、本当に楽しい撮影の期間でもありました。

ドラマ班 代表学生のスピーチ

私はこの動画作成で、脚本、撮影編集の補助、ポスターデザイン、ナレーションに挑戦しました。このような作品としての動画は撮影したことがなく、初めてのことばかりでした。シナリオを考える段階からかかわりましたが、私はどちらかというと話を聞き、相槌をうつばかりでした。今思えばとてももったいない時間を過ごしたなと思います。対話することで自分の考えを伝え、いい作品を作りあげることができたのではないかと考えております。動画作成当初は、今までかかわることの無かった先輩や講師の方に緊張し、意見を述べていいものか、考えてしまったのです。動画作成を通じて受け身にならず、自分の考えていることを他者に伝える必要性を感じました。動画作成にかかわった皆がいろいろなことを考えながら作りあげてきた動画です。今日この日に皆さんにご覧いただけたことをとても幸せに思います。

豊富町観光協会 栗山尚久氏のスピーチ

豊富町で過ごしているながら、こうしてまとめて動画を見させていただくって中々ない機会でもとても感動させていただきました。観光協会として本当に自転車、動画の中でもありましたけど赤い自転車と黒い自転車、よくお使いいただきありがとうございます。正直な感想ですね、この続きぜひ見てみたいなと思いました。動画の中だと時間はすごい短いんですけども、景色みていると相当な時間と自転車乗ってる距離ですとか、車に関しても相当時間かけられたなと、これ先生も生徒も朝早くから相当頑張った面をとったんだなと思います。また豊富町ですね、これだけ紹介いただいて、今の1-2年生にも引き継いで、来年以降見ることができればなと思い、すごく感動させていただくことができました。

川島旅館 女将 松本美穂氏のスピーチ

今回私たちの旅館も全面建て替えをして新しくリニューアルしてオープンするということもありまして、もっともっとまだまだ知られていない豊富温泉をいろいろな形でPR、もっとプロモーションしていきたいという思いがありまして、その中で動画コンテンツを作れないだろうかとなってきたときに(稚内)北星大学にちょっと相談してみようというところがはじまりでした。

打ち合わせを何度かさせて頂いて、そのあとは学生さんたちにバトンタッチをして、企画からシナリオから演技もして、私たちも中学校の発表会依頼かなと思う演技も経験させていただきましたけれども、編集から何から、そしてこういった舞台裏の様子もSNS等で配信するというのも、作品作りの裏側にあるいろんなことも本格的にやっていただけて本当に素晴らしいなという風に変感謝をしていると同時に、私もこの地域に暮らす一員として本当に素晴らしい大学が地域にあるというのは本当に大きな意味があると思いますので、素晴らしい大学が今後も地域と連携しながら、また活動を続けていっていただきたいなと思いました。本当にこうした素晴らしい作品を作っていただきましたので、私たちももっともっとたくさんの、ローカル版“ムズキュン”プロモーションドラマかもしれないですけども、見ていただけるように私たちももっともっと努力していきたいと思っておりますし、これをみて来てくださった方にも満足していただけるように私の旅館としても、また頑張っていきたいなと思っております。



写真 22 俳優二人における舞台挨拶



写真 23 川島旅館女将の舞台挨拶

2. 学生へのアンケート

本章における調査は、2016年4月、7月、11月の3度実施した。4月は「本授業」のガイダンス、7月は本ドラマ制作の中間段階、11月はクランクアップ後（一部編集作業はあり）の段階で実施した。調査者の選定に当たっては、「本授業」を履修していた2年生14名、3年生1名への調査を3度実施した。なお4月は2人、11月は1名が欠席した。本授業の履修学生の出身地は、稚内市12名、豊富町1名、釧路市1名、海外1名であった。

本授業では、「エゾカンゾウの咲くまちへ」の完成を最大の目標とした。本授業の第1-2回は、カメラの練習を含めたCMの作成（写真24）、第3回以降では本ドラマの制作にあたった。



写真24 授業内のCM撮影の様子

調査対象者である履修学生には、事前に調査の主旨を説明し、承諾をとりながら実施した。調査項目は、それぞれ4～8項目から構成され、「映像制作に関するもの」や「豊富町や川島旅館に関するもの」などの質問項目から構成された質問紙を用いた。

2-1. 履修学生へのアンケート調査結果から

2-1-1. 履修学生の動画視聴の現状

本ドラマを主に担当した履修学生 15 名のうち、4 月のガイダンスに出席していた 13 名に対し、日常的に TV（地上波や BS 放送）や、YouTube などの動画サイトをどのくらいの頻度で見ているのか、についてたずねた（図 5, 6）。全体的な傾向として、TV も YouTube も共に「ほぼ毎日」見る学生もいるが、TV か YouTube のどちらかに比重を置いている学生が多く、図 5 と図 6 における「ほぼ毎日」と回答している学生は重複していないものが多い。どちらも「ほとんどみない」と回答したものはいなかった。

スマートフォンなどによる動画の撮影経験については、6 名が「経験あり」、7 名が「経験なし」という回答であった。

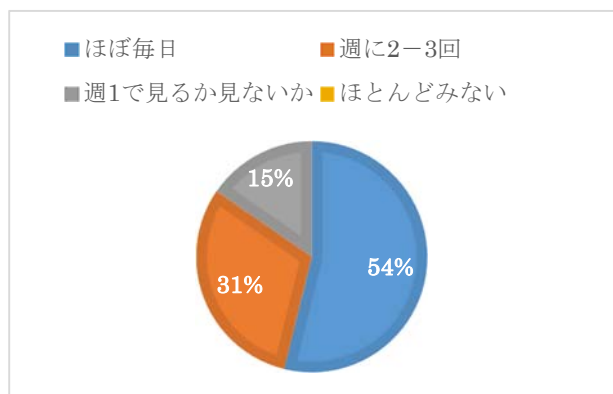


図 5 履修学生のテレビの視聴頻度

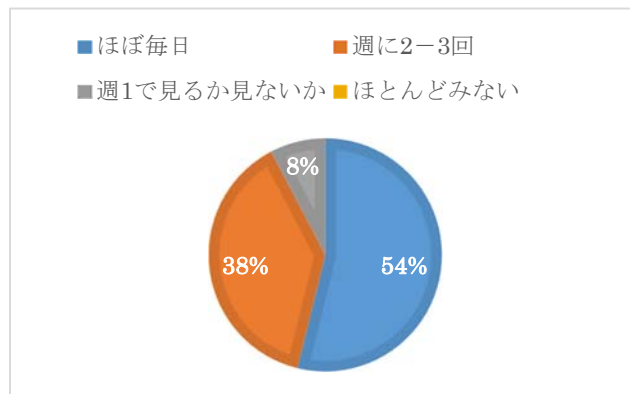


図 6 履修学生の SNS の視聴頻度

2-1-2. 本ドラマ制作における学生の楽しかったところと不満

本授業の履修理由と、本ドラマ制作の楽しいところを制作途中の 7 月とすべての撮影が終了した 11 月の段階で、本ドラマ制作の「楽しかったところ」と「不満」を質問した（表 2, 3）。

多くの学生たちが本ドラマ制作にあたり、4 月の時点では「映像制作」にかかわることを口にしていった。7 月の中間段階となると「映像制作」の具体的なカメラや動き方、編集の仕方など具体的な言及が多く見られた。同時に「自然」や「景色」など撮影を通じて豊富町へ行くこと、カメラ技術以外に関する言及も見られはじめた。全ての撮影が終了した 11 月の段階には、多くの学生がカメラや映像制作に関する言及ではなく、学生たちの共同作業や作品を完成させた「充実感」や「達成感」を口にするものが多かった。また、前章で示したように、7 月に川島旅館の好意で宿泊した合宿に言及するものも見られた。

表2 本ドラマ制作への期待と楽しかったところ

	性別	担当	本授業の履修理由(4月)	本ドラマ制作の楽しいところ(7月)	本ドラマ制作の楽しかったところ(11月)
学生A	男	□	学生会に生かしたい, 教員になった時に生かしたい	映像をどうとれば, いい画とれるか編集が楽になるか考えると楽しい	普段学校で生活していてもできないことができたこと, 自分の作った映像がYouTubeで流れたこと
学生B	男	□	興味がある	作品の完成	作品の完成
学生C	男	□	映像制作, 事業に触れ, 経験をつみたい	川島旅館の合宿, みんなで泊まったのが楽しかった(期限後に提出)	川島旅館の合宿, みんなで泊まったのが楽しかった
学生D	男	□	欠席	1つ1つのコマかな映像が大きな1つの映像にまとまっていくこと	全員で1つのものを作るということで今まで取ってきた1つ1つの映像がまとまって完成していったのが面白かった
学生E	男	□	欠席	稚内のことしか知らなかったような自分が, 豊富のいろいろな場所を訪れてたくさんのもを見ることが楽しい	毎週仲間といろんな風景を発見できて, 本当に充実していた。あれはこの授業を取ったものにはわからない
学生F	男	ド	コースの履修科目	大学のある種大きなかつに携わるということで, 気づいたら制作に自分が真剣になっている, 今までこういったことはしたことがなかったが, この活動を行っていくうちに興味をもったのかもしれない	自分の知らない世界での活動は自分の今後の視野が広がる意味では身になったと思う。充実していました
学生G	男	ド	映像に関して学ぶにはこの授業が一番良いと思ったから	自分で映像を作っているという実感がとても感じられるところ, いつのまにか自分が映画を見るときにカメラの動きや取り方を考えてしまっている	自分の映像撮影の技術が身についたような気がしたところ, 皆と撮影できたこと
学生H	男	ド	皆で1つの作品を作ることに興味があったことと, 1年の時に映像の授業を体験していたから	普段は座学ばかりなので, いろいろな場所へ出かけて様々な体験ができるこの講義は楽しめる	普通の授業と違って土日を使い何度も訪れるという普段とは全く異なるスケジュールで授業が進み, 泊まり込みで撮影をしたりしたこと
学生I	男	ド	一年の時に先輩に進められて	未回答	みんなと一緒に何か作品を作り上げること初めてで楽しかった
学生J	女	ド	興味があったから	編集の仕方が学べる, 映像を制作する土地のことがわかること	完成した映像の裏側を知れること
学生K	女	ド	別の授業で映像を作ったことがあるので, そのことについてもっと経験し, 知識を広めたいと思う	自然の多いところで撮影したのでとても気持ちよかった	インタビュー
学生L	女	ド	映像制作について深くかわり知識を深めたいと思った	普段言ったことのない場所に行ったり, 移動中の車内	普段はいけないう豊富に足を運びいったことの無い場所や見たことの無い景色を見れたこと, 同じ学年でも同じ講義受けることが無い学生とも交流できたこと
学生M	女	ド	動画編集などをもっと本格的に学びたかったから	2つのカメラで同じシーンを取った動画を音がより鮮明な方を人物と口と合わせるのが大変だけど楽しい。自分の力が伸びているのが楽しい。こんな構造で撮れば良いと考えるのが楽しい	豊富のいろいろなところに行ったこと, 豊富の人とふれあえたこと
学生N	女	ド	映像を作ることに関わり, 映像制作の経験をしてみたい	実践を通してカメラの使い方やカメラワークなどを学べる場所, 編集ソフトを使い映像をいじれるところ	編集はあまり活躍できてはいないが, たくさんの素材をつなぎ合わせて見れる映像になったとき, 楽しさを感じた。声取りはちょっとずつ進んでいく過程が面白かった
学生O	女	ド	前回映像に関わる講義を受けて興味があったので履修しました	自分が作った映像の部分を皆で見るのが面白い達成感がある, あと豊富の景色を見るのが楽しい	豊富の観光地を知れて楽しかったし, 面白かったです。皆で旅館に泊まって楽しかったです

一方で、学生たちから出た不満は、7月、11月のいずれにおいても大きく2つに集約される。1つは、カメラや編集の映像制作の技術的な問題への不満である。特に編集班として編集作業を担当した女子学生からは、編集に関する言及が多く見られた。本ドラマ制作は、制作費、機材など限られた条件下で行われていた。プロが行うような外部の大型モニタなどの十分な機材がなく、撮影した映像のチェックを即時的にできず、撮影の成功、失敗は、本学に戻ってからではないと確認できない状況であった。

もう1つは、スケジュールへの不満である。前述のように本授業は、土曜日や日曜日、平日の授業の合間を縫って実施した。天候の都合上、晴天時におけるシーンを計画した撮影が多かったため、7月の土、日に撮影が思うように進まず、平日の午前中などに撮影をせざるを得なかった。撮影が降雨により中止となったり、平日の晴天時に急遽撮影を実施したりするなどレギュラーな撮影が多く、アルバイトをしている学生や自身の予定や都合との調整が難しい側面も見られた。また、朝から撮影をした後、夕方からアルバイトをしている学生も多く、学生は体力的な面でかなり疲弊していたものと推察される。

表3 本ドラマ制作における不満

	性別	担当	本ドラマ制作での不満(7月)	本ドラマ制作での不満(11月)
学生A	男	口	編集に左右されるところ	ありません
学生B	男	口	特になし	特になし
学生C	男	口	土曜日がなくなることがおこった	土曜日がなくなることがおこった
学生D	男	口	天候に左右されやすい、撮り方が悪いと一切使えないこと	映像が足りなかったとしても簡単には撮りに行けなかったこと
学生E	男	口	撮影してきた映像がブレていたり物足りなかったりするとつらい	編集の作業は初めてだったので全くやり方がわからず大変だった
学生F	男	ド	豊富で撮影をするため、ほとんどの作業が土日で行われる	他の講義があるところ以外、ほとんど映像制作でうまっていたこと
学生G	男	ド	土日がなくなったりしたこと	特になし
学生H	男	ド	やっぱり映像制作なので何度も取り直したり天気に左右されるので土日のどちらでも使わさるので体力的につらいときがある	やはり土日が撮影になってしまい、特に授業が多く入っていた前期はつらかった
学生I	男	ド	休みがないこと、打ち合わせが多いこと	当初、毎週土日がつぶれたこと
学生J	女	ド	光の加減で編集しづらいところが出てくる	プロの人がしているわけじゃないので編集がつながらなくて大変だった
学生K	女	ド	撮影するや時間など時々ほかの授業が入ったので撮影に参加できなかったことがある	欠席
学生L	女	ド	バイトとの調整が難しいこと	バイトのある日と撮影の日が重なり、あまり協力できなかったこと
学生M	女	ド	編集のときに俳優の動きを合わせるのが大変	編集のときに俳優の動きを合わせるのが大変だった。俳優の言葉が変わるのが大変だった
学生N	女	ド	元々カメラの使い方がわからない人があまりカメラを触れないところ	編集作業に最後までかかわることができず、申し訳なかった
学生O	女	ド	編集で映像と声を合わせるのが大変	時間を調節するところ

2-1-2. 本ドラマ制作を通じた「豊富町」や「川島旅館」への意識変容

本授業の履修学生の多くは、前述のように多くが稚内市出身である。稚内と豊富は距離にして約50キロ離れた「となり町」である。しかしながら、稚内⇒豊富という人の動きはあまり多くはない。こ
実際に本授業のガイダンス時に、豊富町へ「行ったことがある」が12名、「行ったことがない」が1
名（残り2名欠席）であった。ここでは、豊富町の印象を4月、11月の2度質問した（表4）。4月時点での
学生の印象は、牛乳、温泉といったメジャーなものばかり上がっていた。しかしながら、ドラマ制
作後に行った回答では、学生Eのように「牛乳や温泉が有名という漠然としたイメージしか持ってい
なかったが、北海道でもよく親しまれている牛乳だったということや、アトピー等に効く温泉など
といったとても貴重な資源があるところだと思う」という意見に集約されるように好意的、かつ具体的
な回答が目立った。また「印象が変化していない」という学生も少なからずいたが、そのうちの1名
は豊富町の出身者であったことも付記しておきたい。

表4 豊富町への印象の変化

	性別	担当	豊富町の印象(授業前)	豊富町の印象(ドラマ制作後)
学生A	男	口	子どもが少なく高齢者が多い、農家の方が多い	高校3年間通っても知らないことがあり住みたいと思いました
学生B	男	口	温泉、牛乳	裏が寂しいが、若い人が活性化しようと日々努力していた
学生C	男	口	牛、牛乳、花火大会、温泉	はじめは何もないと思っていたけど、実際に行ってみるととてもいい場所だった
学生D	男	口	欠席	牛乳や温泉が有名という漠然としたイメージしか持っていなかったが、北海道でもよく親しまれている牛乳だったということや、アトピー等に効く温泉などといったとても貴重な資源があるところだと思う
学生E	男	口	欠席	とても大好きになった、本当毎週行くのが楽しみだった
学生F	男	ド	行ったことが無いのでイメージができない、牛とか温泉しかないとは聞くことがあるが	変化はあまりない、豊富温泉のすごさは改めて思った
学生G	男	ド	温泉、パン屋	案内人がいて温泉に通っている人がたくさんいたこと
学生H	男	ド	土地はかなり広いが人が少なく、牛の方が人よりも多い	そもそも豊富の温泉についてほとんど考えたことはなかったためいろいろなイメージを持てた
学生I	男	ド	牛乳、牛、温泉	元から知っている
学生J	女	ド	牛乳、牛	豊富には温泉に入りに来たぐらいで街の中のことは何も知らなかったが、きれいなところがたくさんあることが分かった
学生K	女	ド	豊富温泉、牛乳	欠席
学生L	女	ド	自然が豊かで牛がたくさんいるイメージ、町の人が優しい	頻繁に行くところではなかったし、豊富町事態が田舎なので寂しい感じなのかと想像していたけど、自然豊かで町の方たちも街の雰囲気も温かいんだと感ずることができた
学生M	女	ド	牛や自然が多い、スキー場が大きく、稚内よりコースが多く滑るのが楽しい、パン屋さんがある、乳製品をたくさん作っている、レティエ	川島旅館やふれあいセンターなど町人に愛され、大事にされているという風が変わった
学生N	女	ド	牛がいる、広い、レティエ、スキー場があり人が集まる、隠れ名物が多い	どちらかというと何もないイメージが強かったが、豊富温泉の人は精力的に動き、活動していたのを知り、前のイメージが払しょくされた
学生O	女	ド	牛が多い、温泉、自然豊か	意外と人がウロウロしてて、多少にぎわっていて最初のイメージとは真逆でした

同様に「豊富温泉街」の「川島旅館へのイメージ」について、4月とドラマ制作終了後にたずねた（表5）。

4月の時点では川島旅館を「知らない」と回答したものが多い。また主力商品の1つである「プリ

ン（湯上がり温泉プリン）」への言及も見られた。なお学生 M と学生 N は前述の 2015 年度業務に従事した経験をもつため、他の履修者よりも記述量が多くなっている。撮影終了後には、プリンなどの主力商品への言及にとどまらず、リニューアルされた川島旅館の建物や、女将、板長などの「人柄」への回答も見られた。このような川島旅館への印象を強く持てた要因の 1 つには、7 月に実施した 1 泊 2 日の「合宿」が大きな影響を与えているものと推察される。

表 5 川島旅館に対するイメージの変化

	性別	担当	川島旅館のイメージ(4月)	川島旅館のイメージ(11月)
学生A	男	口	知らない	新鮮な感じがしていて、豊富町が再出発し始めたイメージです
学生B	男	口	プリン	努力
学生C	男	口	知らない	とてもきれいな旅館で人も温かく良いところだった
学生D	男	口	欠席	豊富温泉や豊富町をととても大切に思っている
学生E	男	口	欠席	リニューアル前はいったことがないけど、僕らが行ったときはとてもきれいで汚さないようにと大変だった
学生F	男	ド	知らない	親しみやすい人柄の方々がいる
学生G	男	ド	湯上がりプリンと料理がおいしい	プリン
学生H	男	ド	知らない	とてもきれいで木造特有の香りが落ち着いたため、とても過ごしやすくと感じた
学生I	男	ド	リフォームしている、プリン、バター、大学との協力が強い	リニューアルしてきれいになったし、ご飯もおいしい
学生J	女	ド	いない	撮影にくるまで古い旅館のイメージが、様々な人に知ってもらい取り組みをしていることをした
学生K	女	ド	知らない	欠席
学生L	女	ド	知らない	リニューアルされた川島旅館へ初めて入った時に感じたのはとても温かい雰囲気旅館だなと感じました。一泊させていただいたときもリラックスできて安心できる旅館というイメージを持つことができた
学生M	女	ド	湯上がりプリンやバターを作っている	温泉プリン、アイスなど遠方の方々に愛されている
学生N	女	ド	プリンやバターなどを販売している、改装中、動画をYoutubeにあげている	精力的に動くというイメージが強いです。旅館が新しくなり、新しくなり商品も増えたので、今後どうなるか楽しみです
学生O	女	ド	わからない	川島旅館で一泊して普通の旅館とは違うフレンドリーさがありました

2-1-3. 本ドラマ制作を通して学生たちが得たもの

本ドラマ制作を通して学生たちに「印象に残っていること」、「豊富町の方との思い出」の2つをたずねた。その結果、印象に残っていることは、豊富町の景色、味、川島旅館、牛に言及するものが多かった。一方で、「豊富町の方との思い出」という点では、川島旅館の子どもたちと遊んだことや、豊富町の出演者、第3者からの声かけなどが学生たちの中で印象に残っていた。特に学生Lが言うように観光客などから「頑張ってるね」、「何の撮影ですか?」と声をかけられたことをあげている学生もあり、こうした声かけが自らの活動のモチベーションの向上に寄与した可能性は大きい。逆に、ドラマ制作中は、撮影チームとして集団で行動していたことから、豊富町の方、観光客の方々とほとんど交流の無かった学生も少なからずいた。

表6 本ドラマ制作を通して「印象に残っていること」と「豊富町の方との思い出」

	性別	担当	ドラマ制作で印象に残っていること (11月)	豊富町の方との思い出(11月)
学生A	男	口	「とよとみ」と書いてある山の上で豊富の全景、とても広くてすがすがしい気持ちでした	子供たちと遊んだこと
学生B	男	口	丸勝亭のカツどん	学生が園児に「赤鬼」と呼ばれたシーン
学生C	男	口	言問の松で友達が彼女がほしいとお願いして本当にできたこと	川島旅館の子供たちと楽しく遊んだこと
学生D	男	口	サロベツ原野	湿原センターの嶋崎さんとの話
学生E	男	口	丸勝亭のカツどん	楽しみにしているから頑張ってくださいといわれたときはうれしかった
学生F	男	ド	車で豊富に行くことが多いが、そのたびに牛を見ること	話していない
学生G	男	ド	川島旅館の歴史が古いところ、牛が思っているよりいたこと	「何の撮影ですか?」とよく聞かれたこと
学生H	男	ド	やはり川島旅館に泊まらせていただいたこと	撮影に協力するためにカメラのことに気を使ってくくださった方々
学生I	男	ド	豊富町全体	友達のおばあちゃんと協力できたこと
学生J	女	ド	湯上がり温泉プリン、今までにないプリンだった	特にない
学生L	女	ド	印象に残っていることはやっぱり「牛の出産」、実際に出産中を見ることはできなかったけど、生まれた直後の子牛さんを見れたことは印象に残っています。	撮影で訪れる場所は、観光客の方がほとんどだったので、豊富町の方と直接やりとりした記憶はないけど、観光客の方に「なにしてるの?」と聞かれ、説明をすると必ずどの方も「すごいね、頑張ってるね」と応援していただけたこと
学生M	女	ド	川島旅館のプリン、アイス、温泉	川島旅館の子供たちと遊んだこと
学生N	女	ド	サロベツ原野です。撮影は主にエゾカンゾウでしたが成り立ちをしることができました	川島旅館のちびっ子たちと遊んだことです。自然や旅館で体を動かして遊んでいたのも、のびのびと育つんだなあと思いました
学生O	女	ド	言問の松を初めて見て自然の豊かさが印象に残っています	

3. 本ドラマの制作者、関係者へのインタビュー調査から

3-1. 調査方法と内容

調査は、2016年11月～12月に実施した。調査者の選定に当たっては、他の学生と大きく仕事内容が異なると推察される俳優の学生2名と、本ドラマの制作に協力いただいた4名へ聞き取り調査を実施した。

調査対象者には、事前に調査の主旨を説明し、ボイスレコーダーによる録音の承諾をとりながら実施した。インタビューアーは筆者が行った。調査は、一人当たり45分程度を目安とし、学生と地域住民に「半構造化インタビュー」を行った。学生への調査項目は、①本ドラマ制作の大変だったところ、②本ドラマを通じた学び、③豊富町への印象の変化、などについてである。また豊富町住民への調査項目は、①本ドラマの感想、②学生が作った意義について、③本映像を通じて学んだこと、などを質問した。本稿では得られた音声データの「テープおこし」を行い、そのトランスクリプトをもとに、質的記述的分析をおこなった。なお「語り」の引用に際しては、そのまま引用しているが、方言や「若者言葉」、前後関係が不明瞭な点に関しては、一部筆者らによる注釈を加えている。また個人が特定される表現については、<>を使用して差し替えを行っている。

表7 インタビュー調査のプロフィール

	所属・役割
学生A	俳優班
学生B	俳優班（豊富町出身）
豊富町住民A	山岸牧場関係者
豊富町住民B	豊富町観光協会関係者
豊富町住民C	川島旅館関係者
豊富町住民D	川島旅館関係者

3-2. 学生（俳優）へのインタビュー調査

本節では、学生へのインタビュー調査の中から見えてきたポイントを5点示す。まず、第1に、本ドラマ制作において「学生が楽しかったこと」についてである。ここでは学生A、Bが今回のドラマ制作において「楽しかった」ところをたずねた。

今まで関わりなかった<学年>と関わったっていうのは楽しかった、今まで仲いい人っていなかったから、こんな面あるんだとか、意外にこの人面白いやとみたいなかんじで、これが面白かった。あれが面白かったっていうよりみんなで何かできたのが面白かった。
(学生A)

振りかえってみたら、大半が面白かったように感じる。(具体的には?)撮影のときとか堅っ苦しい雰囲気じゃなかったってのは大きかったんじゃないですか。(一番楽しかった時

は?) その撮影の時に一番楽しかったときってなったら、(7月に実施した) 泊まりの時の、あのめっちゃ長い時間撮影した後の旅館かえって、軽く飲んでみたいな・・・流れ。あの流れは面白かったですね。そういう流れ自体が好きなのかもしれないけど。(学生B)

その結果、俳優を中心とした学生A、Bは、「新しい友達」、「仲間」など交友関係に言及するものが多かった。本ドラマ制作では、カメラや編集などの映像制作技術以上に、1つの集団としてのチームワークのようなものが芽生えているものと推察される。

第2に、前章でみたように多くの学生は「スケジュール調整」と「編集などの技術面」への不満をあげていた。しかしながら、俳優班の2人は、他の学生とは異なる点で不満や辛さを感じていた。

「休み」がなかった、思っていた以上に休みがなかった。っていうのと、でも休みない以上に「準備」かな、つらいの。荷物多いし、髪は変に短くもできないし、長くもできないし、化粧もちょっとずつ変わっていくから、それを「前どうやったっけ?」って思い出しながらやるのが、っていう準備がね、忙しかった。

あ、あと時季外れな格好、冬にTシャツとか、秋の長袖シャツ(1枚)とか、夏はすごい暑いし、冬は寒いし、夏暑かったね、意外に、格好だけかな。(学生A)

振りかえってみたら、思い出は美化されるというかなんというか、良い経験になったというあれがきますけど、当時はかなりつらかったですけどね。(何がつらかった?) それこそ、モチベ(モチベーション)じゃないでしょうか。撮ってるときとか、めっちゃテンション低いなとか思いませんでした? (なんでモチベが下がったのか?) 休みじゃないですか? 前期は授業詰まっていたから。それプラス土、日、月とバイトあったし、朝起きて7時とかに起きて撮りにいって、こうやって撮って、17時過ぎに帰ってきて、17時から帰ったらすぐバイトいって、12時(24時)過ぎまでバイトして、帰ってもう寝るだけみたいな。(学生B)

俳優の二人は楽しさを感じながらも、他の学生とは異なりスケジュール調整、さらには学生Bのようにアルバイトとの両立に苦勞し、一時期大きくモチベーションが低下していた。他のドラマ班、ロケ地班などは「代わり」がいるものの、俳優の二人は、被写体であり「代えがない」状況におかれていた。今回のドラマ制作は、天候やエゾカンゾウの開花時期による制約も受けながらの撮影であった。そのため、最終的には楽しかったと述べているものの、制作の途中では、かなり苦勞をしながら撮影に望んでいたことは疑いようがない。

第3に、本ドラマの映像制作を通じて豊富町へのイメージの変化についてたずねた。その結果を下記に提示する。

(撮影前は?) 知らない場所、っていうか稚内から名寄いくまでに通り越しちゃう場所みたいな、すごい存在は薄かった。(撮影後は?) 動画で何回も豊富いって、やっぱりいろん

な場所行ったから、他の人に話はできる、豊富意外に良かったよみたいな、＜出身地＞と似た環境だし、牛多いし、だけど「このスポットあったし」という話はできるから、知ればちゃんと観光地なんだな一って、温泉はね、石油の匂いってというのがよくわかんなかったんだよね、オレンジの匂い？だったの、そんなにくさいわけでもなかったから、温泉のシーンとるのに、何回も入ったり出たりを繰り返したから、撮影だけですすごい肌が変わったのさ、1時間も入ってればそうなるんだけど。だから温泉良かったよ一ってというのがすごい印象に残っている。(学生A)

歩く道、フットパスっていうのは知らなかった。…(中略)…「言問の松」ってなったら、豊富から稚内行く途中にあるから、実際に降りてなんちゃらするわけじゃないから、実際に降りて何とかするってなったのは、初ですよ。『謂れ』とか知りませんでした。(学生B)

前章のアンケートにも見られたが、学生Aのように豊富は「通り越しちゃう場所」と捉えるのは、非常に象徴的な回答である。稚内から名寄方面へ抜ける国道40号は、現在豊富バイパスが整備され、豊富北ICから幌延ICまでノンストップで行くことが可能となった。そのため、「豊富町」や「豊富温泉街」を通過することなく名寄や旭川などの大都市へアクセスが可能となっている。前章で見たように稚内市出身の学生が多いのにもかかわらず、「豊富町のことをあまり知らない」との回答は、本学学生に共通する傾向であった。

第4に、川島旅館についての印象についてたずねた。どちらの学生も本ドラマの撮影が始まるまで川島旅館の関係者と面識がなかったと回答している。

(川島旅館について、以前は)知らなかった、旅館って堅苦しいところじゃん、普通。堅苦しいしお金もかかるし、行ってスゴイ板長さんと女将さん、すごい面白い人だった、やさしかったし、気さくに話してくれるし、ジョークは言ってくれるし、撮影だったってのもあるけどその堅苦しい旅館っていうのは違ったし、“でっかい家”にお邪魔している感じ、きれいだった、おしゃれだった、新しいからっていうのもあるんだけど。(学生A)

川島旅館(今回の撮影を通して)初めて入ったんですよ。(豊富町に)20年いたのに。川島旅館は行ったことなかった。(豊富温泉街)の温泉閣にはよく日帰り入浴とかいってたんで。家族とかってなったら温泉閣、去年先輩たちと1年くらい前に突発的にきたときは(豊富町営の)ふれあいセンターに。(7月の合宿で)あそこで初めて川島さん夫妻とあったから、その前に撮影で行ってたかな、でもそんなにガッツリ話すあれではなかったから、そこであって、そこで人と人のパイプが構築できたかなと。でも、あの人たち自体いい人だったし、それ自体、(7月の)泊まりの時とかスゴイ良くしてくれてたので、そこはこのつながりはすごい良いつながりだったのかなと。ごはんとかもおいしかったし、朝ご飯も出してくれたし、それこそ(女将さんから)何か(本ドラマの自分が出演していたシーンの)映像見て「いいね」みたい

な声もかけられましたけど。(学生B)

俳優の学生は、川島旅館の関係者から演技の感想を述べられたり、撮影の合間にも会話をするなど他の学生たちよりも多くの会話、交流の機会に恵まれていた。

最後に、学生Aには、温泉や入浴シーンの撮影の様子、状況について、学生Bには豊富町や自身の周りにおける反応について質問した。

温泉(の撮影)はねー、水着きる、撮影には女性しか入らないというのが徹底されている分、別に何ともなかった。だって他の子たちとは普通に温泉入るわけだから、その分、水着来ている分、何ともなかった。(できた映像を見ての印象は?)一発で全部撮れなかったっていうのがあるから、のぼせちゃってるのがね、自分やってる分面白見えちゃう。先生方がいなかった分、指示してくれる人がいなかった分、どうしようどうしようって結構迷ってたんだよね、(温泉の)中で。そんな時にしんどいなーって、のぼせちゃう、のぼせやすくて、何回も出ること続いちゃって、スムーズに動かないのつらいな、先生いないのつらいなーっていうのと、<私>がのぼせちゃうのを気付いて結構、<他の子>が気にしてくれてたんだよね。<私に>「水どうぞ」とか、「少し上がりましょう」とか声かけてくれたんだけど、その二人が気にしてくれている分、他の人たちがスムーズにいかないと当たり強くなっちゃうっていうか、<私が>頑張ってるんだから早くやるよ、ギクシャクしかけたから、正直牧野さん(=牧野先生)来てほしいなって思った。(牧野先生がいた方がよかった?)人にもよるんじゃないかな。<私>がスムーズに進むために牧野さんいてもいいよっていうかもしれないけど、他の人(女子学生)で男入ったらまずいじゃん、って思わない人がいなくもないわけじゃん、それを考えるといなくてよかったんじゃないかなと思う、後々のことを考えて。(学生A)

前章でも確認したが、このシーンの撮影、大まかな編集に関しては、女子学生のみで実施した。撮影の指導は、構図の指示などは旅館のロビーや入浴前に実施した。編集の指導に関しても大まかな編集作業は、女子学生のみが担当し、(男性)教員の関与は最終的な編集、微調整以外はすべて女子学生が実施した。

一方、豊富町出身の学生Bの周りでは、学生Bが出演したことによる反響が同年代から見られた。

豊富のメンツと飲みに行ったら、同級生なのに<私>が出ている動画がどうたらこうたらってなるんですよ、何だこれかと思って、<居酒屋>で飲んでだったけど、役場で働いているやつが、どうこうこうだっていって、いきなり鑑賞会はじまるんですよ、そこで。公開されていたのが1話だけだったかな?そのときはまだ、いきなり鑑賞会はじまって、俺がもくもくと飯を食いながら・・・まわりのみんながすごくいいじゃん、みたいな。「えーどうも」みたいな感じですね。いい人生のネタができたと思えば。あと小学校6年のときに、豊富から転向したやついるんですよ、栃木とか、だったかな? ちょうどそいつの

LINE 持ってるんですけど、この前ふと朝起きたら、YouTube で川島旅館の動画に出てたねーみたいなのがいきなりきて、おまえ何で知ってるの？みたいな話になるわけじゃないですか、YouTube で豊富とか定期的に調べたりする人なんですって、豊富小学校出てたから、そんなところまで。YouTube って偉大だなあって思ったり、ネットで偉大だなあって思ったり…。(学生B)

以上のように、同年代の友人との飲み会における鑑賞会の話や、転校した知人から連絡があるなど、豊富出身の学生Bを俳優として起用したことで、このような反響が見られたものと推察される。ここでは、著作物である本ドラマが YouTube というインターネットサイトで公開されたことのメリットが現れた結果といえる。

3-3. 豊富町住民へのインタビュー調査

本節では、豊富町住民へのインタビュー調査の中から見えてきたポイントを5点示す。

第1に、本ドラマの内容面において「良かったこと」についてである。

やっぱりドラマづくりに来た、撮影に来てるのが全部わかるので、季節感がこう1話ごとにいろいろ混じってるじゃないですか、編集がやっぱりよくできているなあって、季節がちゃんとわかるようになってるっていうか、上手くそこらへんはね組み合わせて、一本のドラマになっているなあっていうのが、編集がすごいやっぱりいいなと思いましたね。(豊富町住民A)

そうですね、えーと、自転車が効果的に使われてたなってのはすごい感じました。自転車を豊富駅前から借りていただいたってのもあるんですけども、黒い自転車、赤い自転車、いい形で登場して上手い具合に溶け込むように使われていたなってのが印象に残っています。(最初どう使われるとおもってましたか?) どういう風になるのかな? っていう期待感の方が大きくなって、すべてをもし自転車で移動するとなると相当撮影の時大変だろうな、あと撮影する場所によっては自転車でいけるんだろうかというような心配はしてました。例えば大規模草地牧場含めて、車だけで移動できるのであればいいんですけど、もし自転車でいくとなると実際大丈夫かなと思いつつ、学生さんだから元気があるかなっていう、そこは期待と楽しみながらの期待感というかありましたね。(実際に使われた感じは?) 自転車が中心になりすぎず、いいタイミングで主人公がいろいろ考えたりとか移動したりする手段としてレンタカーとかを借りて移動しなくてよかったなって言うのはすごい思います。(レンタカーを使われなくて良かったとは?) 動画の中で動いているシーンというのが、自転車か軽トラでの移動だったんで、普通に自分で車で運転してしまうと見過ごしてしまうような景色だとかあったと思うんですけども、そこを実際どのくらいの距離自転車で乗られたのかっていうのは見えない部分ありますけれども、自転車ならではの風の感じ方とか、景色の見え方があるっていうのがいいなっていう部分と、あと軽トラのスピード感、助手席にのっ

て周りを眺めながら移動するっていうのがすごく、普通にレンタカーだけだったら通り過ぎてしまう景色も、実際には目に留まったのかなと、そういう意味でもすごく良かったなと思いますね。(豊富町住民B)

ある意味仕上がりのクオリティは、学生っぽくないっていうか、玄人っぽいよね。素人の学生が作ったって感じませんが、撮影の現場とかを私たちは一緒に体験しているので、そういう準備したり、音響だ、何とかだつてのをみんな学生さんたちがやってくれたり、シナリオができてたり、SNSを活用しようっていうのがあったので、今日は衣装の打ち合わせしてまーすとかっていう経過も見れていたから、作品そのものに学生らしさっていうのは仕上がりに対して学生らしさっていうのは感じないですけど、主演の二人のフレッシュ感には非常にあふれてるんじゃないでしょうか(豊富町住民C)。

一番印象にあるのが、(7月の)お泊り会の時のことしかないんですよ、僕の頭の中には、あーいうのを間近で見て、学生なんだよなって思ってた、撮影しているときとかも牧野先生とかに指示されながらも、みんな自分たちでやりつつ、一番おもしろいなって思ったのは、(SNSにおいて)撮影風景みたいなやつが、チョロっと、NGシーンみたいなやつが見せたから、あーいうところだろうなって。作品自体はすごいちゃんとしたものに仕上がっているから、そこに対して学生がやりましたみたいところはあんまりわかんないけど、裏側っていうかプロセスの間をずっと見ているから、すごい楽しかったですよね。(豊富町住民D)

本調査対象者の多くは、撮影の学生たちが実際に撮影をしている風景と一緒に体験したり、撮影にご協力をいただいていたものが多い。撮影を通して、学生たちと一緒にの時を共有したり、撮影に来ていたことを把握していることもあり、本ドラマの制作に一定程度の関心を持っていたことが伺える。とくに豊富町住民Dが述べている7月の「お泊り会」は、川島旅館のご好意により学生16名、教職員3名という20名近い本学スタッフがオープン前の旅館に宿泊させていただいた。学生たちの語りの中にも「印象に残った」という声が見られたが、当事者である川島旅館関係者にも印象的なものとなっていたと推察される。

第2に、本ドラマ制作において見えてきた「不満」や「今後の課題」についてである。

スマートフォンって持ってるお母さん方そんなにいないんですよ、何人も、だから稚内の友達とか、娘さんとかそういう世代方の人たちにちょっと教えてるって感じで、大体半々くらいかな、ガラケーとあれ(スマホ)とが。(豊富町住民A)

観光協会として考えたときに、もう少し広範囲の施設ですとか、宿泊施設とかが入ってくると、使いやすいかな?っていうのはありますね。あまり川島旅館さんだけの宣伝、PRになってしまうと、協会としてはちょっと使いづらい部分があるのかなっていうのが正直

なところですね。(豊富町住民B)

1つ言うならば、どれもきれいに取れてて良かったんだけど、せっかくドローンが旅館に来た時にちょっと風が強くて上まで上がれませんって言われたのが、心残りですかね。私は建物もとても素敵にできているんだけど、周辺もそれなりにきれいになったって思ったから、旅館を俯瞰で上から見たかったなっていうのは次へのリクエストですけど。(…中略…) 私たちもパンフレットとか作るとき、そうなんですけど、お湯、温泉って裸ではいるじゃないですか？、そこの表現の仕方って難しいっておもって、今回も千花ちゃん入ってくれたけど、ともすると嫌な眼で見られる可能性がゼロではない感じじゃないですか・・・(中略)・・・やっぱり、「ウフン」っていう感じになっちゃう。入るしかないんだけど、どうしたもんかなと思っています。(豊富町住民C)

それぞれの豊富住民から本ドラマの制作から見えた不満や今後の課題をあげてもらった。1つは、YouTubeを中心とした配信方法についてである。前述のように若者はスマートフォンやタブレット端末を保持しているものの、中高年者の中には動画サイトによる視聴が容易くない部分もある。こうした配信方法への課題である。第2に、特定の民間企業との連携のあり方についてであり、第3に温泉シーンの撮影についてであるが、これらの2点に関しては後段に譲ることとする。

第3に、本ドラマ制作を通じた「豊富町内や川島旅館への反響」についてである。

1話、2話のときはね、これどこの牛舎？って<集落>の人、お母さん方が、どこの牛舎って言ってたの。女の子が佐藤千花って子だったから、佐藤牧場？佐藤牧場ってどこ？、結構あたしの方から見てみてって、<知り合いの子が>出てるから見てみてって宣伝してるんで。(川島旅館さんについては?) 普段あんまり付き合いとかはないですね、「豊富温泉街」の「温泉閣」はよく行く、お風呂が遅い時間でも入れるから、宴会でもみんな老人クラブもそうだし、青年部もそうだし、婦人部もあそこで宴会なんですよ、だから今回も川島旅館あんな感じで出てるし、見てみたいし、ちょっと宴会でもできないのかね？って話はしてたけど。(豊富町住民A)

私自身で何か直接聞いているっていうのはないですね。こうだったよねとかっていう感想とかも正直あんまり聞かないですね。知り合いてあんまりインターネットとか持っている人いないから。一般の人たちがどこまで知っているかっていうと、特に直接かかわったところ以外の人あんまり知らないのかなっていう(豊富町住民B)

それこそ業界関係者っていうか、いろんな元々の知り合いみたいな人はこうだったねって言うってくれても、一般のお客様からは中々まだ聞けてないですね(豊富町住民C)。

(旅館に)きた人で、動画やってますよねって言って見てた人はいましたよ。食事の時とか、

なんかそれを見てきたってよりは、ちゃんと HP とかスゴイしっかりしてますよねって言って、「(ドラマに) 出られてましたよね?」, 「あ、はいはい、動画を見てくれたんですね」, 「あ、あれもよかったです」とかっていうのはありましたね (豊富町住民 D)。

豊富町住民 A のように、今回の撮影を通じて川島旅館が話題の 1 つとなっている点は、本ドラマによる影響と推察される。知り合いの学生が出ていたリアリティもあり、本ドラマに愛着が湧いている様子が推察される。一方、豊富町住民 D のように本ドラマの反響を聞いている声もあるが、現実的には豊富町住民 B や C のように、一般の旅行客や、豊富住民からのリアルな反応は多いとは言えない。学生たちのアンケート結果を参照するに、撮影中に声をかけられたり、撮影風景が第三者の Twitter でツイートされていたりはしたものの、本ドラマの撮影であったことの説明や宣伝にはつながってなかったものと推察される。

第 4 に、本ドラマによる「豊富住民たちの学び」についてである。ここでの学びとは撮影風景や、映像全般について限定した質問を行っている。

川島 (旅館) さんの奥さんってあーこんな感じだったーとか、旦那さんの方は知ってるけど奥さんの方は知らないとか、あと駅のおばあちゃん、みんな知ってるから、あー駅まだやってるんだねーとか、なんかあそこ中々ランプついていることないから、いってもついてないねーって、初めてわかりました、ランプが点灯しててやってるんだー、そうなんだーみたいな、いつやってるんだろうみたいな感じですよ、(…中略…) あと (映像に出てくる) 場所見ると面白い、ここは知ってるだとか、ここ通ってるんだとか、方角とか大体わかります、言問の松の時は、こっちからこう来てんのねとか…そういうの面白いですよ、ここ、こうやって走ってるのね。(豊富町住民 A)

最初の方のシーンで、<千花>が川島旅館の方に歩いていくシーンがあったと思うんですけど、川島さんが迎えに車での間ですね、周りの景色がちょっとあってというところで、あれは歩きならではの景色の撮り方だなんておもいましたね。車でいつも走っちゃうとパッと見過ごしちゃうんですけど、<千花>の時間の流れとあの距離感っていうのはすごくよかったなど、あのシーンはすごく印象的でしたね。稚咲内のシーンも、夕陽もちゃんとできてましたし、すごくわかりやすく撮られているなと思いましたね、他のポイントも。ステーションの明かりがついていたら営業している、すみません、私あれ知りませんでした。あれは聞いたら、駅の方で働いている人は、みんな知ってるんですけど、私あれ知らなくて「あーそうなんだ」っていう、あれ今回の映像で初めて知りました。

「(きっさ) すてーしょん」のナポリタン食べるのところとか、“シズル感”が印象的でした。(豊富町住民 C)

牧草地とか、あの辺が、(サロベツ) 原野もそうですけど、近場を撮りつつ、空撮みたいな

のもありつつ、雄大さはやっぱり近場撮影だけではあんまりわからないじゃないですか、遠くにパンしてとかってのもあるのかもしれないけど、本当に360度何もないよみたいなのを、あのドローンの映像があったからすごい説得力がある。見てる、実際に場所もわかってるし、なんとなく見慣れている風景だけどちらが見てもこんなだったら、初めて見た人はすげーなこって思うだろうなっていう、雄大さがすごい伝わってきました。改めて映像から入ってくる豊富の良さみたいなのが、目で見た方が絶対にいいなっていう風に思ってたから、映像見てもらってそこまで伝わらないだろうって思ってたけど、結構伝わるんじゃないかな？みたいな、そういうちゃんとしたものができていたら、それはそれでね、違うんだなって言うのはすごい驚きましたね。(豊富町住民D)

本ドラマの学びとして、1つは自分たちの知らなかった豊富の現実について、もう1つは撮影技術、技法により可視化することで感じた現実の2つに集約されていた。1つ目の自分たちの知らなかった豊富の現実としては、豊富駅前にある「きっさすてーしょん」の営業形態、とりわけ「信号(ランプ)」について補完したロケ地紹介による影響が大きかったと推察される。もう1つの、映像技術、技法という点では、豊富町住民Dの「雄大さ」、「映像から入ってくる豊富の良さ」という2つの語りに集約される。「ムーブユー」のご協力により実現したドローン撮影や、スタビライザー付カメラによる動きながらの接写などカメラ技術の提供無くしては実現しえないものであった。

第5に、本ドラマを学生が制作した意義について、総括的な質問をおこなった。

(学生たちが撮影に来ることについては?) いいと思いますよね、いろんな人っていうかね、こういう感じでモノが作られてるっていうか、そういうところをね、やっぱりね、いろんな人に見てもらいたいっていうか、豊富なら豊富の中だけで知るんじゃなくて、ほかの地方でこういうところの牛乳はおいしいって、結構みんな豊富牛乳、おいしい、おいしいって言ってくれるんで、こういう感じで作っているんだとかっていうのがね、わかってくればいいかなって。(豊富町住民A)

前に(本学と一緒に豊富町の観光協会の)ホームページ作った時にもご覧いただいてたつのもあったんですけども、4年生、3年生、2年生それぞれ見方が違うというか、たぶんとなり町であってもこんなところがあったんだ、こういう風なところがあるんだという発見にもつながったのかなってそれが、実際学生さんだけでなく、稚内から休みの日に豊富に遊びに来るよっていう話をすごく聞くようにはなってるんですね。割と近くでも知らないところは知らないんで、そういう意味では豊富町を舞台にしたドラマを制作していただいて、そこは観光協会としても本当にうれしく思っています。(豊富町住民B)

それこそ企画も含めて、ありきたりじゃないものができたっていうところと、でもクオリティもちゃんとしている、作品としてきちんとしたものができたっていうところに満足しているのが1つと、地域の未来を担う若い学生さんたちに機会を提供できたという形で

貢献できたならば、一企業としてもよかったなと思うのと、TV ドラマとかと一緒に一体感というかチームみたいな感じになったことが、私たちにとっても関わってくれた学生のみなさんにとっても本当に10年後、20年後に残って行って、それこそみんな大きくなって結婚して、子ども連れてきて、「お母さんドラマ作ったんだよ、あはは」みたいな感じで、また懐かしい気持ちで再会できるといいなっていう感じですかね（豊富町住民C）

機会っていうか場があったっていうことが学生たちにとってすごい大きいんじゃないかと思って、なかなか「じゃ、やりますよ」って行って、先生から直接教えてもらいつつも、授業としてやるっていう部分と、こういう風に実際に現場で実践として、大人含め、みんなとのやり取り含めやるっていうのは、本番といえば本番、社会に出たときの経験になるっていうのもあるから、机で座って勉強するっていうのとは当然違うし、学生は今ではわからなくても後々わかるだろうなっていうところと、個人的には生徒とか若い子たちが何を考えて、何をしたいかとかそういう行動をすごい知りたかったんで、何喋ってるんだとかも含めて、くだらないこと喋るんだとか、こういうこと考えてるからこういう風に接しなきゃだめなのかなとか、そういうことの方がすごいタメになったというか、今の若者っていうか、意思の疎通も含めて、どうやってコミュニケーションをとったらいいんだろうというところが重要な部分なので、いい経験になりました。（豊富町住民D）

これらの語りの中で、それぞれの豊富町住民から、地域、社会の現実を知ること、すなわち実践とそれを体験することの重要性が指摘されていた。豊富町住民Aは、酪農という産業の重要性を、豊富町住民Bからは、豊富町というまちの魅力について、豊富町住民C、Dからは企業との連携による経験の場としての本ドラマ制作の意義について語られていた。豊富町住民Cの語りにあるように学生たちとの数年後の再会を待ち望む姿は、学生を短期的な視点、単なる労働力としてではなく、長期的な視点で彼・彼女らの成長を期待していることが伺える。また、豊富町住民Dの「いい経験になりました」という語りからは、依頼主としてだけではなく、自身も学生たちから学び、それを今後につなげていこうとする姿勢が読み取れる。

おわりに

本稿は、学生による豊富温泉街を舞台とした連続ドラマ『エゾカンゾウの咲くまちへ』の制作過程に着目し、①制作に当たった学生たち、②「豊富町」や「豊富温泉街」の住民にどのような意識の変容があるのか検証することを目的としていた。以下では、本稿から得られた知見を4つ述べたい。

第1に、映像制作に当たった「学生の地域意識に対する変容」についてである。本ドラマの制作に当たった学生のほとんどは稚内市出身であるが、その多くは、「隣町」である「豊富町」、「豊富温泉街」について「行ったことがない」、「ほとんど知らない」と回答していた。稚内から豊富町へは距離にして約40キロ、車で約40分程度の距離にある。前章までに見たように、学生たちは5月～9月の土日の多くを豊富町に通い詰めた。また7月に川島旅館で合宿したことや、撮影で豊富町の住民との交流を深めながら撮影に望んだ。その結果として、学生たちは、当初「とよとみ」と記号的な理解であ

った町について、本ドラマ制作によって自然、景色、食材（食品）、人など、「まち」を多面的に理解する大きな契機として脳裏に刻まれたものと推察される。これらの結果は、「映像制作を通して、地域を理解する」という1つの新しい可能性となることが示唆された。「地元学ネットワーク」を主宰する吉本哲郎は「地域のことをみんなで知れば、新しい何かが見つかる」とし、地元にあるものを探し、新しく組み合わせたりして、町や村の元気をつくっていくことを、地元学の根幹におく。自分たちが住む地域を足元から見つめ直し、地域づくりにつなげる実践的手法ともいえる（吉本, 2008）。地元学などでは、模造紙のような紙媒体にまとめ、それをもとにした口頭による報告（報告会）が一般的な手法であった。今後はこの確立されている手法に、さらに映像を通して可視化するアウトプットが1つの可能性として見えるだろう。誰もが簡単にスマートフォンなどで動画撮影をできるようになった、また動画によるわかりやすさを求めている時代となった現代社会において、こうした方向性の模索を始めるべきである。本授業における実践は、かかる今後の未来に一石を投じる画期的な実践の1つといえるよう。同時に映像制作は、メディア・リテラシーと捉える指摘もこれまで多数報告されている（松野, 2002；駒谷, 2005）。しかしながら、本稿における結果から、このようなメディア・リテラシーという視点以上に、地域理解や当事者間における関係性の構築が有益であったと推察される。

第2に、「授業」と「請負業務」を連動させた「新たな授業展開」への関心である。本連続ドラマの制作指導は、本学非常勤講師である筆者（牧野）を中心とした「映像メディア論Ⅰ・Ⅱ；映像メディア演習Ⅰ・Ⅱ（牧野・侘美）」の授業と課外活動を連動させながら実施した。従来、学生はアルバイトと授業を切り分けて生活している。民間企業の川島旅館から請負業務を受け、依頼主とのやり取りを通じて、実際に自分たちで企画、撮影、編集した作品を制作する過程を通して、学生にも「責任」や「納品」など通常の授業では味わうことのできない「リアルな緊張感のある業務」を体験できた。同時に学生と本学の指導体制の限界も垣間見えた事例が3つあった。

1つ目として、「撮影日程の制約」についてである。今回の本ドラマの撮影においては、①天候（晴天）、②エゾカンゾウの開花状況などの自然、③筆者（牧野）の指導可能な時間（土、日、平日の夕方）の3つのタイミングを合わせなければならなかった。特にエゾカンゾウは、開花時期が6月の中旬～7月の中旬と限られた時期にしか開花せず、満開の時期と晴天が合う確率はかなり低い。とりわけ今年の6、7月の土日は雨が多く、また晴天の日は学生の都合が悪いなどスケジュール調整が上手くいかなかった。幸いにして、水曜日の午前中に撮影を実施できたことと、7月の1泊2日の「泊まり合宿」で遅れを取り戻すことができたが、状況的には「賭け」に近い状況であった。室内における撮影とは異なり、①天候、②開花状況などの自然、③非常勤講師の3つと、片道40キロの距離的な問題も含め、今回の学生が取り組んだ業務は、かなり障壁の多い実践であった。こうした状況下ではあったが、学生たちの本ドラマ制作への思いに支えられた。とりわけ俳優の2人は替えの利かない存在であり、他の学生のような代役が不在であった。そのため撮影時を休むことができず、多くの負担を強いる結果となった。とくに千花役の学生は、登場時間も長く、シーンやカット割りも多かつたため、多大な負担を強いる結果となった。

2つ目として、「温泉シーンの撮影」についてである。第3章で俳優、川島旅館関係者から聞き取り調査の結果を提示しているが、学生に温泉の入浴シーンを撮影することについては、本人の了解はもちろんのこと、撮影スタッフ、構図などかなりの配慮が必要であった。学生はプロのモデルではない。

そのため業務とはいえ肌の露出を無理強いすることはできない。今回の撮影に関しては、女優の了承により実施できたが、人前で学生が肌を露出するという点ではハラスメント防止の観点からも慎重な配慮が必要となる。今回のように依頼主が温泉を1つの売りとする依頼に際し、今後は学生側やハラスメント防止への配慮が必要である。

最後に、「特定の1つの企業」と連携することの難しさである。「あまり川島旅館さんだけの宣伝、PRになってしまうと、(観光)協会としてはちょっと使いづらい部分があるのかなってというのが、正直なところですね」という豊富町住民Bの指摘である。今回の本ドラマの制作は、川島旅館からの請負業務として遂行された。しかしながら、同時に地元、地元の関係団体からこのような指摘を受けることは、大学と地域の特定企業との間で民学連携として進めていく際に遭遇する可能性が極めて高い指摘である。関係団体との調整、合意形成なども必要であるが、請負業務としての性質上、選択の余地がない大学側としては極めて回答に窮する指摘であった。

第3に、「映像制作を媒介としたネットワークの構築」についてである。今回のようなドラマ制作では、豊富町の観光地、「きさすてーしょん」、認定NPO法人「サロベツ・エコネットワーク」、環境省北海道地方環境事務所、北海道旅客鉄道株式会社、山岸牧場からの協力をいただいた。また、ドラマで使用した自転車などは、豊富町観光協会から無償提供を受けた。聞き取り調査で見られたように、豊富町住民Aは川島旅館と直接的な面識がなかったり、「きさすてーしょん」については、学生ならではの視点で「ロケ地紹介」として編集がなされていた。学生Bがいうように「人と人のパイプが構築できた」ということは今後も重要なつながりとなり得ることが推察される。一方で、豊富町住民Cが言うように、学生たちが「親となった時」までも見据えた長期的な視野は、今後の民学連携で学生を育てるという視角からは重要な配慮である。また学生、豊富住民双方が撮影現場という同じ場を共有し、相互に活動を見守り、交流が行われるなかで、学生は地域住民から地域の現実を、地域住民は学生から映像制作の現実を学ぶ機会となっていたものと推察される。こうした関係性の構築は、今回のドラマ制作を通じて、今後の地域づくりへの糸口となる可能性も推察される。今後も継続的な研究の蓄積が必要となるであろう。また、大学として、地域住民とともに、このような「学びあい」、映像を作りあげることが、本学が志向している「地(知)の拠点^②」としても有意義な実践となることが推察される。

第4に、YouTubeをはじめとする「地域発のデジタルコンテンツの可能性」についてである。現代社会では、従来のように決まった放送局や権利者から映像が配信されるという固定化された役割を飛び越え、YouTubeやFacebookなどのSNSを通じて、個人が情報を発信する機会が多様にある。こうした中で、北海道の最北端に位置する本学の制作したドラマの第1話や2話が1000回以上も再生され、国内外の視聴者に届けられている。こうした1つのローカルな実践がグローバルに波及する、しかもその成果物である映像が視覚的にわかりやすく、さらにSNSなどのシェアによって簡便に不特定多数の人に拡散していく。学生Bのように「栃木の友人から突然連絡があった」というエピソードは、YouTubeによる配信でなければ見られなかった光景である。同時に、スマートフォンなどの端末を持っていない人、また中高年者などYouTubeというサイトや、そこで得られる情報に抵抗感を示す人も少なからず存在する。今の若者がTVを見ないように、中高年者の中にはインターネットやSNSに興味を持たないものもいる。豊富町住民たちへの聞き取り調査の結果、豊富町では積極的にSNSを

活用するという層がさほど多くはなかったものと推察される。そのため本ドラマが豊富町の住民に大きなインパクトを与えたと結論づけるのは少々ハードルが高い。しかしながら、本ドラマを楽しみに、かつ興味深く見守っているコアなファンがいることも聞き取り調査の結果から明らかである。今後、本ドラマをどのように活用していくのか、今後の課題の1つ言える。

最後に本稿の限界と今後の課題を2つ述べておきたい。第1に、本稿では学生による連続ドラマ制作を「映像制作」の枠組みにとどまらず、学生、地域住民、地域づくりなど多様な視点を取り入れた分析を試みることを眼目としていた。しかしながら、「豊富町」、「豊富温泉街」住民からの関心は高いとは言えない状況であった。そのため「豊富町」、「豊富温泉街」住民への調査は十分に実施することができず、また映像と地域づくりへとつながる十分な論証をするに至らなかった。また旅行者への調査については、本ドラマ作品が10月以降、月1話ずつアップロードされることから、本紀要論文にその影響を分析して盛り込む時間的な制約が大きかった。この点に関しては今後も継続的な調査が必要となる。

第2に、本稿は、本ドラマ制作の中心である学生とその詳細な実践の記録をもとに内容面を検討してきた。一方で、本ドラマ制作は「請負業務」として映像の質の制約を受けたため、制作した本ドラマとその一連のプロモーションは、筆者ら(牧野・侘美)による指導、特に牧野による介入のバイアスを否定できない。今回の結果で提示した内容には、筆者らが、映像面、学生と住民とのパイプ役など様々な点で直接的、間接的に影響を与えていることを否定できない。今回のような実践研究において、教育者のバイアスをどのように排除し、精緻化するかは、筆者らの今後の課題であるとともに、本稿における限界の1つである。

最後に本稿の今後の展望を3つ述べたい。第1に、今回筆者らが実施した講習内容について、より方法論的に厳密な質的研究を行い、メディア社会学や動画制作の議論との理論的な擦りあわせが検討課題である。本稿では、授業プログラムの紹介や学生たちの学びにフォーカスしている。そのため、映像制作における実践的、理論的な枠組みとの整合性についても再検討の必要がある。

第2に、「実際の旅行者(≒動画視聴者)」への調査である。本研究の全体構想において本ドラマが旅行者(動画視聴者)、「豊富町」、「豊富温泉街」の観光業の関係者へどのように受け入れられたのかについて、旅行者(動画視聴者)の視点から見た評価や課題への関心があった。同時に、本ドラマ制作による集客へ与える影響や、「豊富温泉街」からの反響についても関心があった。しかしながら、本稿ではこうしたダイナミックな動きを捉える時間的、十分な調査期間を設けることができなかった。今後は完成した本ドラマを題材とした「旅行者」への調査も継続的に実施する必要がある。

第3に、本ドラマの「映像そのもの」の分析である。研究代表者である筆者は、映像を専門とする研究者ではない。そのため映像そのものではなく、そのプロセス、関係性、学び、地域社会の受容といった映像制作を俯瞰的に見てきた。実際に撮れた「画」や構図、映像効果などの分析は一切していない。本ドラマ制作を映像的な視角から分析し、その視覚的な作用や効果についても分析することは可能であろう。以上3点を今後の課題とし、本稿を結ぶ。

● 註

- (1)「豊富町」と「豊富温泉街」は、豊富町内に位置する。しかしながら、「豊富町」と「豊富温泉街」は約6キロ、車で10

分ほどの距離に位置している。そのため豊富町の中心市街地から距離的に離れていることもあり、契約書などの書面上では両者を区別した表記を使用している。そこで本稿では以下の2通りの表記を使用する。「豊富町」と表記した際には、「豊富町」、「豊富温泉」と2つに分けて記載している場合がある。

一方、豊富町と表記している際には、行政区分上の豊富町をさす。その際には「豊富町」住民とともに「豊富温泉街」住民も含むこととする。また「豊富温泉」と「豊富温泉街」は、特に断りが無い限りは、「豊富温泉街」で表記を統一している。しかしながら、契約書上や引用時には「豊富温泉」と表記していることもある。

- (2) 稚内北星学園大学は、2014年に文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された。文部科学省のHPによると、「地(知)の拠点整備事業」は「大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的」とされる。通俗的には「COC事業」という名称で呼ばれることもある。

●参考文献

エゾカンゾウの咲くまちへ公式HP

<http://movie.kawashimaryokan.co.jp/> (2016年12月31日閲覧)

木島由晶, 2013, 「動画共有サイトでは何が共有されないのか」, 土橋臣吾, 南田勝也, 辻泉(=編著)『デジタルメディアの社会学—問題を発見し, 可能性を探る [改訂版]』, 北樹出版, 東京, pp.82-95.

駒谷真美, 2005, 『『いまだきの子ども』とメディア・リテラシー教育』, 松野良一(=編著), 『市民メディア活動—現場からの報告—』, 中央大学出版部, 東京, pp.172-182.

松野良一, 2002, 『総合的な学習の時間のための映像制作マニュアル—メディア・リテラシーとメディア・アクセスの視点—』, 田研出版, 東京.

松野良一, 2005, 『市民メディア論—デジタル時代のパラダイムシフト—』, ナカニシヤ出版, 東京.

文部科学省, 「平成26年度「地(知)の拠点整備事業」の公募」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1343250.htm (2016年12月31日閲覧)

NHK放送文化研究所, 「2015年 国民生活時間調査」

http://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/20160217_1.html

大杉卓三, 2010, 「稚内北星学園大学とNPO法人映像コミュニティ・ムーブユー」『大学の地域メディア戦略—映像番組制作による大学の地域貢献』, 中国書店, 福岡, pp.142-149.

高谷邦彦, 2005, 「もう, テレビなんて, いらない。—最北からの情報発信—」, 松野良一(=編著), 『市民メディア活動—現場からの報告—』, 中央大学出版部(東京), pp.2-32.

高谷邦彦, 2008, 「地方都市の観光情報発信におけるCGMの有効性について」『情報文化学会誌』15(2): 49-56.

斉藤ひろし, 2006, 『一週間でマスター 斉藤ひろしのシナリオ教室』, 雷鳥社, 東京.

佐藤一子(=編), 2015, 『地域学習の創造—地域再生への学びを拓く—』, 東京大学出版会, 東京.

下平尾勲, 2006, 『地元学のすすめ—地域再生の王道は足元にあり』, 新評論, 東京.

総務省, 「平成27年通信利用動向調査の結果」

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html> (2016年12月31日閲覧)

寺本潔, 2001, 『教材発見町ウォーキング—商店街から近代化遺産まで—』, 明治図書出版, 東京.

辻泰明, 2016, 『映像メディア論—映画からテレビへ, そして, インターネットへ—』, 和泉書院, 大阪.

結城登美雄, 2009, 『地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』, 農山漁村文化協会, 東京.

吉本哲郎, 2008, 『地元学をはじめよう』, 岩波ジュニア新書, 東京.

稚内北星学園大学, 映像作品集 <https://www.youtube.com/user/wakhok1987> (2016年12月31日閲覧).

●謝辞

「エゾカンゾウの咲くまちへ制作委員会」の皆様, 学生, ゼミの皆様, さらには(株)川島旅館様, 豊富町観光協会様, 山岸牧場様など多くの方々のご協力により, 本稿を執筆することができました. ここに深謝いたします.

なお本稿は, 平成28年度稚内北星学園大学COC事業「地域志向教育研究経費『採択課題: 連続ドラマ制作による学生と豊富温泉街住民の意識変容(研究代表者: 佐美俊輔)』」より研究資金の助成を受けて執筆されました. 研究経費を助成いただきましたことにつきまして, 感謝申し上げます.

●英文タイトル

Consciousness change of students and Toyotomi-Onsen residents through continuous drama production

~ Paying attention to the production process of "Ezo-Kanzo's blooming town"

●英文要約

In contemporary society, "departing from television" is pointed out mainly by young people. However, it is an era in which everyone can easily watch "movies" by enriching social media such as video distribution sites and SNS. Furthermore, it is possible to easily create "movies" with smartphones and others. Amidst these era, the authors have practiced classes to collaborate with local private enterprises and produce community-based "continuous dramas".

This paper aims to examine the efforts of a series drama "Ezo-kanzo's blooming town" in a bird's-eye view produced by Wakkanai Hokusei Gakuen University and private enterprises in collaboration with the private sector. As a result, in this drama production, it is inferred that cooperation between universities and private enterprises has caused a change in consciousness to both the students and Toyotomi Town residents, building a connection with the community through movie production.

●Keywords

Movie production

Drama production

Commercial collaboration

Local study

Regional Understanding

YouTube